

---

# コイン

著

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コイン

### 【Zマーク】

Z3648D

### 【作者名】

秀

### 【あらすじ】

ある時は女を騙し、ある時は女を心から愛する—結婚詐欺師の純愛！（全14話）

## 1話 獲物

司会者の大袈裟な合図で、見合いパーティが始まった。芝純一は30名の女たちに、ざつと視線を走らせた。

（獲物はお前か？ それとも金ピカ女か？）

ナンバープレートを胸に付け、プロフィールシートの交換。純一はさりげなく相手の女の手を握るようにして、それを手渡した。

田星を付けた女にだけする純一のサインだ。

時間は3分間。

自己紹介じぎゅつと田を這わせると、純一は職業と年収をチェックシートのスミに素早く書き込んだ。

「女医さんですか。すごいですね」

「父の経営する病院を手伝っているだけですから・・・」

「あなたほどの人なら幾らでも相手はいるでしょう」

「医者って職業柄、意外と普通の男性からは敬遠されるんですよ」  
「開業医の長女なら、医者同志で引く手あまたじゃないのですか」

「そうですね。でも、中々縁が無くて。

あつといつ間に30を過ぎてしましましたわ

32歳。

職業 医師

年収 1000万円

住所 枚方市。

家族と4人暮らし。

性格 のんびり、明るい。

学歴 国立大卒。

身長 160センチ。

結婚歴 無し。

自己紹介をアチコチ見ながら

（年収は1000万円）

（開業医だからかなりの資産持ちだろ？）

（容貌は並下だな）

純一が心の中で小さく呟いた。

「どんなタイプが好みですか」

「優しい人がいいかな。そして、包容力のある人なら」

「僕では駄目ですか」

「えつ！？ 急に言われても・・・」

芳恵がドギマギしている。

純一がじっと目を見て、芳恵の心の中を覗き込んだ。  
芳恵は慌てて視線を外した。

（この女はあまり男を知らないかもしね）

「映画が好きなんですね」  
プロフィールシートを見ながら、純一が言葉を出した。

「ええ」

「今度、ご一緒しませんか」

「・・・」

「楽しみにしています。では、先生の芝です。  
ご縁がありましたら、またお逢いしましょう。失礼します」

純一は芳恵の目をじっと見詰めた。

（好きだよ）

心の中で熱く呟くと、純一は田に思いを込めた。

芳恵の目が恥ずかしそうに輝いた。

純一はチェックリストの芳恵の欄にダックマークを入れた。

3分間が終わり、次の相手に。

純一は平凡な〇〇や年収の低い年増女には全く関心が無かった。

次の相手も、次も、次も、次も・・・、関心は無かった。  
外観が良くても、若くても、たとえ好みのタイプでも。

お見合いパーティに参加しているのは単なる情報収集。  
獲物を捜すための手段でしかなかつた。

次の相手の職業に、純一は興味を示した。

プロフィールシートには、

エステ経営。

年齢39歳。

一番大事な年収は書かれていない。

夏川絵美。

身長164センチ。

住所 芦屋市。

ひとり暮らし。

1回の離婚歴。

短大卒。

純一はプロフィールシートの交換の時、わざと手を握るようになした。絵美の手は、エステを経営する者にふさわしい優雅な手だった。

純一はその手を見て、エステ経営が成功していると直感した。

「エステを経営されているのですか」

「まあ」

「たいしたもんですね」

「たいしたことありまへん」

「ええ

上から下まで、シャネルで決めている「ージャスな女の口から、似つかわしくない関西弁が・・・。

「何店経営されているのですか」

「北、南、神戸、京都の4店でんな

「へえ、4店もですか」

「それなら年収は億ですね」

「半分も稼いでまへんわ。変なこと聞かんとつて。  
それより、あんた独身か?」

「独身です」

「結婚はした」とはないんか」

「ええ」

「なんでや」

「たまたま縁が無かつたもので」

そつと云つて、芳恵と同じ答え方をしている自分が、純一は可笑しかつた。

「あんた、バツイチでもええんか」

「そんなもん関係はないですね」

「夜は強いんか」

「試してみますか」

「今晚、試してもええか」

「じゃ、7時、花月の前で」

「曾根崎にあるお笑いの花月やね」

「そうです。最終投票には入れないで下さいね。」

僕も入れませんから

「よつしゃ。そうするわ」

「じゃ、今日の7時、花月の前で」

「ほな」

絵美の目が淫乱に笑っている。

純一はクールな顔でそれに答えた。

「時間がきました。席の移動はここで終わりにします」

司会者の大きな声が響き渡った。

フリータイムとなり、話をしたい相手と話し合える時間となつた。

純一はわざと芳恵と絵美を外し、適当な相手と雑談をした。

芳恵と絵美をチラツと見る。

芳恵の粘っこい視線が自分を追い掛けている。

純一が女たちと笑い転げていると、芳恵の顔はとても悲しそうだった。

絵美の視線は違つていた。

（覚えときや。あとで死ぬ位にいじめたるから、覚悟しちき）

そんな言葉が聞こえてきそうな、意味深な視線だった。

（獲物は餌に喰い付いた）

純一は長年の勘で、確かな手応えを感じていた。

フリータイムが終わり、最終投票に。

投票カードには第1希望から、第4希望の相手を記入出来る。

純一は誰の名前も記入せずに投票用紙を提出した。

「カップルを発表します。男性4番と女性15番、10番と3番、16番と21番、25番と11番、

4組のカップルの誕生です。おめでとうございます」

司会者がカップルを発表するたびに歓声が上がった。

「カップルになられた男性は外で女性を待ち、後で退場する女性を優しくエスコートして下さい」

司会者はさりに発表を続けた。

「カップルにならなかつた方も、アフターチャンスがござります。後日、気になる相手に連絡出来るこのサービスを「利用下されば、またチャンスが訪れます」

純一はアフターチャンスで芳恵の連絡場所を聞き、後日連絡するつもりでいた。

今日の獲物は絵美だ。

絵美の目を思い出すと、獲物にされるのは自分かもしけない、純一はそもそも考えていた。

(喰うか喰われるか)

(だから、面白い。だから、止められないのかもしけない)  
(報酬は幾らにするか)

純一は絵美の事を考えながら、阪急三番街からすぐ近くのマンションに向かった。

このマンションは一戸のウイークワーマンション。  
3ヶ月位で引っ越しつもりでいた。

(7時まではまだ3時間ある)

自宅に入ると、すぐパソコンのスイッチを入れた。

見合いパーティ『アゲイン』に電話をし、アフターチャンスで芳恵と絵美の住所と電話番号を聞き出した。

マイドキュメントから、duck listを引き出し、クリックする。

今日の獲物の詳細をパソコンに入力する。

ダックは今日の2羽を含めて、5羽になった。

この仕事は情報収集が命。

のが決まれば、ゅうへり、ゅうへり、気配を感じられず、獲物を罠に追い詰めてゆく。

獲物が罠に掛かれば・・・絶対に逃がさない。

獲物からほんの一部の報酬を頂けば・・・自分の正体がわからない内に行方を暗ます。

獲物を早めに逃がしてやれば、・・・獲物は狩人を恨まない。

グレーのスーツに、赤とグリーンのレジメンストライプのネクタイ。下着は新品の黒のボクサーパンツ。

出来るだけ知的に上から中までを纏め上げる。

純一は適当に時間を潰すと、曾根崎通りにある花月に足を進めた。途中、自動販売機で栄養ドリンクを求め、純一はそれを一気に飲み干した。

「よし……」

右手で拳を作ると、それを思い切り握り締めた。

純一は久し振りに命がけで仕事に取り込む覚悟でいた。

地下街で肉うどんを食べ、軽めに腹ごしらえを済ませると、15分前に花月の前で絵美を待った。

絵美が5分前に現れた。

絵美は真っ赤の皮のジャンバーの下に、ピンクのTシャツをさりげなく見せ、スリムなジーンズをカジュアルに着こなしている。

高級なシャネルスーツから見事な変身。敵にとつて不足なし。

「待った？」

「いや、少し前に来たところだ」

「ご飯は？」

「済ませて来た」

一人を見れば、今日逢つたばかりとは、誰も思わないだろう。

「ほな、行こか」

二人はそこから歩いて5分位にあるラブホテルに向かつた。

ホテル5番街の中に入ると正面に、部屋ナンバー、価格、空き室を表示したパネルにキーが掛かつている。

「どれでも好きな鍵をお取りやして」

ボックスのカーテン越しの小窓から、年配のおばさんの声が聞こえた。

「501号室がええわ」

絵美がホテルの最上階の部屋の鍵を取つた。

「お帰りになる時はフロントまで電話しておくれやつしゃ」

二人は狭いエレベーターで5階まで上がつた。

「ビジネスホテルみたいやる。いつももケバイ事あれへん。そやから、うちはこのホテルが好きやねん」

絵美はこのホテルの馴染みらしい。

二人は部屋に入った。

部屋いっぱいにキングサイズのダブルベッドが置かれている。

絵美が言うように、シンプルでラブホテルらしさが全くない。6畳位の部屋の横にトイレ、洗面台、バスルームがある。

「シャワー一緒に入らへん」

「いいよ」

純一がシャワーを使つていると、絵美が入つて來た。

「背中洗つたろか」

絵美がタオルにボディソープを付けて、純一の背中を洗い出す。

「やつぱつや。いつの想像した通りや。あんた、筋肉質のええ体してるわ」

「・・・」

「つひも洗つてくれへん」

純一が急いで絵美の背中を洗い、逃げるよう前に先にバスルームを出した。

純一がベッドに寝そべっていると、絵美が体にバスタオルを巻いてこちらに来た。

「何で逃げるの。あれからがええとこやつたの？」

（逃げたのじゃない。じらしたのだ。盛りの付いた雌豹めが）

純一は心の中で女を見下していた。

「俺は恥ずかしやがりなんだ」

「へえ、そりなん・・・。うちを見れる。田んぼいたら許せへんぞ」

絵美はバスタオルを下にパツと落とすと、挑発するように全身を見せ付けた。

純一は無言で絵美の手を荒々しく引っ張ると、絵美を力付けで押さえ付けた。

「うへへへんんんんん」

絵美がうめき声を上げて死んだよつになつた。

純一が絵美を見詰めた。

絵美は目をしつかりと閉じている。

その時、絵美の目から一筋涙が零れ落ちた。

純一が涙に口付けし、涙を口で拭つた。

絵美の目がパチリと開いた。

絵美は純一を力いっぱいに抱き締めた。

「やつぱり、うちの睨んだ通りや。あんたは最高や」  
純一は首に回した絵美の腕をさりげなく振り解くと、素早く身支度を整えた。

「そんなんに急がんかて、もつとゆづくつしたらええの」「急ぎの用があるので、悪いがこれで失礼する。

勘定は済ませておくから

純一がフロントに電話を入れる。

「待つて。連絡場所を聞いておくわ。教えてくれる

「電話はこちらからするから」

「なあ、教えてえな」

「俺は忙しくて、普段は私用の電話には出ないのだ。

「ちらから電話をするから待つていて欲しい」

「なんで、電話教えられへんの」

「言つ事が聞けないなら、これで終わりにじよつ」

「待つて。わかったわ。負けたわ。うちが待つわ。  
その代わり、絶対電話をすると約束して」

「ああ約束するよ。近い内に必ず電話をするよ」

「きつとやで」

「ああ、わかった。じゃな」

フロントで勘定を済ませると、純一は5番街を足早に出て、夜の地下街の雑踏の海に潜り込んだ。

絵美は純一が忘れられなかつた。純一の事を考えるだけで、頭が痺して、他の事は考えられなかつた。

「芝 純一」  
「芝 純一」

何度も、この名前を呟いた事だらう。

寝ても、食べても、トイレ中も、仕事中も、ボーッとしてる時も・・・

絵美は純一の事を考えていた。

そして、絵美は一日中、携帯電話を見詰めていた。

逢いたい。

顔を見たい。

抱かれたい。

声を聞きたい。

唇を重ねたい。

筋肉質の体に触れたい。

結婚をしたい。

電話は1週間しても掛かってこなかつた。

初恋にうなされる小娘のよつて、絵美は純一にうなされていた。

『アゲイン』のホームページを見ていて、絵美はアフターチャンスがある事を思い出した。

「もしかしたら、電話番号がわかるかもわかれへん」  
絵美は『アゲイン』に電話をして、純一の住所と家の電話番号を聞き出した。

急いで絵美は純一の家に電話を入れた。

「お掛けになつた電話番号は、現在使われていません。もう一度お確かめになつて、お掛け直し下さい」

神戸の住所と電話番号は引っ越し前の住所と電話番号だった。

引っ越ししてからすぐに、純一が『アゲイン』に登録したのだ。

「連絡できへん。あの馬鹿は何で電話してけえへんねんやろ」

絵美は社長室の一輪挿しを壁に投げ付けた。

ガチャン!!

その時、携帯に公衆電話から電話が入った。  
電話の相手は純一だった。

「もしもししゃれです」

「あんた、8日もうちをほつたらかして、何してんのん」

「悪い。ついつい忙しかったもん。今日は逢えるか  
「ちょっと待つて。予定表を見るわ。ああ、大丈夫や」

「じゃ、7時、前の花月の前で」

「ああ、わかつたわ」

一人は7時に花月の前で逢つた。

5番街で二人は体を重ねた。

上機嫌の絵美が、帰り支度をしている純一に、微笑みながらベッドから話し掛けた。

「あんた、うちのパートナーになれへん

「パートナー？」

「共同経営者や。京都と神戸の店の面倒見て欲しいねん」

「共同経営者か。いい話だな。

でも、俺も事業を始めよつと思っている所なんだ」

「それ、もう始めてるん

「まだなんだ。

資金が少し足らなくて、いま資金集めで忙しく走りまくっているんだ

「幾ら足らへんの」

「1200万円は集めたんだけど、  
800万円がどうしても集められなくて」

「なんや、それだけでええのんかいな。  
それ位ならうちが出したるわ」

「それは出来ないよ。俺が何とかしてみせるよ」

「水臭い事言わんとこで。その代わり条件があるわ。  
その仕事がうまく行かなくなつたら、

100パーセントうちのパートナーになつや」

「100パーセント?」

「せや、その意味はわかるやう」

「ああ、まあな」

「そんならお金は任せとき」

「本当にいいのか。約束は必ず守るナビ」

「決まりやな。今度逢う時に現ナマを用意したるわ。  
うちな、見合いパーティの始まる前からあんたに皿をつまつてん」

「ええ、どうして?」

「うちの好みのタイプやねん。

マスク、筋肉質の体、知性、それにテクニック。

あんたはうちには超サラブレッドや

「俺がサラブレッドか」

「そや、あんたみたいな男はもう絶対に捜されへん。  
うちのもんにしたいんや」

「俺も君の事が気になつていたよ」

「ほんまか」

「つか、超嬉しいわ」

そつ言つと、絵美は純一を力いっぱい抱き締めた。

純一も絵美を形式的に抱き締めた。

(900万円でも良かつたかな)

純一は壁を見詰めながら、算盤をはじいていた。

純一はあれから3日目に絵美に公衆電話から電話を入れた。

「もしもし、絵美です」

「絵美やけど。今度はえらい早いな。

前は8日もまつたらかしといて。やつぱり、お金はモノ言つな

「それなら、もつと後から電話を入れるとじよ。では、ま・・・

「ちよい待ち。冗談やんか。あほ!」

お金の力でも、何でも、つけはあなたの声が、  
はよ聞きたかつたんや」

「俺も同じだ。お金を借りるなんて言わなければ良かつた。

あの話は・・・」

「冗談や言つてゐやが。それで、いつ逢えるん

「明日の予定は

「待つてや……OKや。お金もそれまでに用意しちたるわ

「済まない」

「あんたとうちの仲やないの。水臭い事、言わんといで

「じゃ、午後7時花月の前で

「めひやめひや、楽しみにしてるわ」

「じゃ、明日な

「待つてん!」「

「普ッ普ッ普ッ」

「待て! 馬鹿たれ芝生!..!」

あくる日の7時前、純一は黒のバッグを持って、花月の前で絵美を待っていた。

「あれ、持つてきたで

カバンを少し持ち上げて、見せびらかすようにしながら、絵美が現れた。

「ありがとう。恩に着るよ  
「ちょっと見せたろか」

「ここではいいよ。いつもの所へ早く行こ!」

「それがええな」

一人は足早に5番街に向かった。

一人は502号室に入った。

「はよ! 脱いで」

絵美はあつとこつ間に裸になつてこる。

「よつしゃ。ベッドにひぶせになつて寝転んで」

「・・・」

絵美がルイ・ヴィトンの手提げバッグから一万円の札束をハツ取り出した。

「ええことしたるからな。楽しみにことや」

「ンマリ笑うと、絵美が帯封のある札束を純一の背中の上にゆづくりと並べ出した。

「一つ  
二つ  
三つ」

「四つ。どや、気持ちええやろ」

純一は背中の上に金が並べられているのを感じながら、今日は命の限界まで仕事に励むつもりでいた。

「五つ  
六つ  
七つ  
八つ」

「どや、重たいか」

「ずつしつと最高の重さや。ありがと」

純一はゆづつ立ち上がると、札束を拾い集めた。

「これは有難く預かっておく」  
急いで、純一は用意したカバンの中にそれを入れた。

「借用書はまだつけてない」

「そんなもんいらん。

あんたがうちに近くしてくれたら、それでちやうぢや。それより、はよおいで」

純一は真心を込めた。

それが、純一の精一杯のお礼だった。

純一は呼吸を整えると、素早く身支度を整えた。  
ベッドには絵美が屍のよう横たわっている。

「あらがとう」

軽く敬礼をすると、純一はバッグからメモとペンを取り出した。

先に失礼する。会計は済ませておくから。  
お金ありがとうございます。感謝をしているよ。

芝

ベッドを見ると、絵美はまだぐつたりとしている。

（お金は有難く頂戴する。俺の精一杯のお礼はしたつもりだ。  
じゃ、元気でな）

純一は無言で絵美に語り掛けた。

純一はホテルの清算を済ませ、急いで5番街を出た。

（これで、絵美にもう逢う事は無いだろ。）

この女なら1000万円以上頂けただろ。

しかし、欲を出して、警察に訴えられたら、命取りだ。

これでいい。次の獲物は芳恵だ）

純一は自宅のあるマンションに足を速めた。

ひと仕事が終わった。

汗が乾いた体を優しく撫でる4円の風が、純一にはたまらなく心地良かつた。

絵美は苦しく切ない日々を送っていた。  
純一を忘れられなかつた。

知的で甘いマスク。

精悍な体。

紳士的な話し方。

とりわけ忘れられなかつたのは、とろけるような口付け。

腕、足、耳、指の爪、髪の毛、唇

そして、鉄板のように硬くて厚い胸。

純一の全てが忘れられなかつた。

純一と最後に逢つた日の事を思い出すと、今も体の芯が疼いた。  
しかし、あれ以来、純一からの電話は掛かつてこなかつた。

「あの馬鹿、何で電話をくれへんのや」

絵美は気が変になる位に純一を求めていた。

しかし、あれ以来、純一から電話は掛からなかつた。

1日24時間。

眠りの中でさえも電話の音に聞き耳を立て、電話が鳴れば絵美は飛び起きた。

こんな状態で10日が過ぎた。

純一から連絡は無かつた。

絵美は何が何でも純一を捜すつもりでいた。  
時間とお金を幾ら掛けても。

たとえ、経営する4店を手放す事になつても、純一を捜す氣でいた。

(あんな男はもつこない)

そう思えば思ひもどり、逢いたい気持ちがぐらぐらと沸騰した。

純一を警察に訴える気は、海の砂粒の一粒さえも絵美には無かつた。

純一は絵美の前から、永遠に姿を暗ました。

## 2話 出逢い

純一の母親の吉見たえが脳梗塞で倒れたのは、およそ1年前だった。右半身不随になり、それ以来、気分が余程優れない限りは、寝たきりの生活を送っていた。

吉見淳也は、芝純一の偽名で、それまで東京、福岡、名古屋で転々と今の仕事を行っていた。

母親の病気の再発を考え、いつでも対応できる実家に近い危険な大阪で、純一は仕事をするようになつたのだ。

（母親が死ぬまでは、やばい大阪で用心深く仕事をするか）

獲物の情報収集に力を入れ、報酬は出来るだけ低く、引き際を出来るだけ迅速に。

無理をしないよう、欲を出さないよう、純一は仕事をしていた。  
(警察に捕まり、母親を悲しませる事だけは死んでも避けたい)

純一は阪急電車の車窓を眺めながら、ぼんやりと母親の事や、大阪での仕事の事を思い巡らしていた。

桂駅で電車が停車し、純一は電車から降りた。

純一は本名の吉見淳也に戻った。

(母親の顔が、また見られる。危険でも大阪に帰ってきて本当に良かつた)

母親の元気な顔が見られると思つと、淳也は足早にタクシー乗り場に向かつた。

ヘルパーの綾瀬 かんなは昨日の夜、サービス提供責任者から勤務のシフトのメールを受け取つていた。

「2時から3時は吉見さんか」

かんなは吉見さんの家に向かつて自転車を勢い良く漕ぎ出した。

「今日は、綾瀬です」

かんなは玄関を開けた。

「あつ！ くさい！！ 何よ、この臭い・・・。  
いやな予感がするなあ」

きっと、大便と小便の臭いが混ざり合つていてる臭いだらう。  
息もしたくない。

「吉見さん、何かあつたの？」

かんなはたえが寝ている部屋まで走つて行つた。

「あつ！！！」

かんなは部屋を見て、ただただ呆然とした。

部屋中には、おむつとパットと柔らかい便と、ティシューと着替えと座布

団と新聞・・・とが、あちこちに散乱していた。

それも、おしつこにぐちょぐちょに濡れた畳の上に。  
おしつこのアンモニアの臭いプラス、大便のあの臭い。イコール、異様な臭いが部屋中を占領していた。

たえは、なぜかベッドから落っこちて、ベッドにもたれて座つていた。

左手は便にまみれ、着衣にも至る所に便がべたりと付いている。

何と、顔にまで便がべちょ～と。

そして、たえは赤子のように、わあん、わあ～んと泣いていた。

「死にたいわ死にたいわ。  
後生だから、殺しておくれ」

「大丈夫よ。大丈夫だからね。いま、いい空気を入れて上げるからね」  
かんなは急いで窓ガラスを開けた。庭からさわやかな風が入つて來た。

「ちょっと、待つてね」

かんなは急いで自転車の荷台から非常用具を取り出した。

それは、あるおばあちゃん宅での事。

絨毯から床まで糞尿まみれの中で悪戦苦闘した時、自分の足や体中が便だらけに。

そんな苦しい経験から、古い雨靴と制服、ゴム手袋を荷台に常備するよびになつたのだ。

「これで良し」

玄関で非常用に着替えると、かんなは大急ぎで、異臭が蔓延する部屋に戻つた。

「待つてね。まず、ここを片付けてしまつわね。

それから、綺麗にしてあげるから。吉見さん、それまで待てる?」

「うん・・・」

たえがこいつくりと頷いた。

「あつ、その前に顔と手のウンチだけ、やつと拭いておこうか」  
さくらは便と尿まみれの中を雨靴で、ざくつざくつとたえの所まで歩いて行つた。

「雨靴に履き替えてよかつたな。大胆に行動出来るわ」

かんなはタンスの上から予備のティッシュペーパーの箱を取り出すると、箱の上をバリバリと開けた。

「吉見さん、なぜ顔にウンチを付けているの」  
「・・・」

「これで、綺麗になったわ。  
後で、ウエットティッシュで拭いて上がるからね。  
次は、手を出してくれる」

かんながたえの手の便を拭つていると、そこへ淳也がぬつと現れた。  
「くさいな～。たまらんわ。いったい、お袋、どうしたんだい」

「ああ、淳也 カい。 わあ～ん、わあ～ん。死にたい わ～」

たえが淳也の顔をみると、またべそをかき出した。

「何が、あつたの」  
「わあ～ん、わあ～ん」

「泣いているばかりじや、何もわからないじやないか  
「息子さんですか。はじめまして、かんなです。  
今は、そつとして上げて下せー」

「はじめまして。お世話になります。淳也です。了解しました」  
「それより、手伝つてもらつていいですか」  
「わかりました。何をすればいいですか

「その格好では何ですから、  
まず汚れてもいいものに着替えてもらいますか  
「了解です」

淳也はかんなの姿をじっと見詰めた。

「雨靴に、ゴム手袋か。さすがにプロだな」

淳也は2階の自分の部屋に走って行った。  
かんなはてきぱきと片付け出した。

「何をすればいいですか」

「あらっ、早かつたですね」

「あなたひとりに押し付けられませんからね」

（この人は優しい人だな）

かんなは直感した。

淳也をかんなが見ると、自分を真似しているのか、長靴とゴム手袋をはめ、古いジーンズとトレーナー姿だった。

かんなは自分の真似をしているのが可笑しくて、心の中でپپと笑つた。

（この人はこんな格好でも素敵な人だな）

異様な悪臭に包まれた汚物まみれの戦場について、かんなはなぜか心がときめいた。

「じゃ、ゴミ袋を出して、汚物を皆その中に入れてもらえますか」

「了解です」

「あつ、それから、申し訳ないのですけど、  
便はナイロン袋に入れてから捨ててもらえますか」

「またまた、了解です」

「出来ないモノは私がしますから、

別の所に纏めて置いておいて下さー」

「了解の了解です」

「人は真ん中にゴミ袋を置き、部屋の右端と左端に分かれて汚物を片付け出した。

「それにしてもお袋のやつ、

片手だけだよくこれだけ散らかしたものだな」

便の付いたティッシュを片付けながら、溜息交じりに淳也が呟いた。

「ベッドから落ちて、パニックになつたのでしょうか。叱らないで下さいね。

年をいけば、誰でもいつかはこうなるのですから」

（それにしても、優しい人だなあ）

淳也は汚物を嫌な顔ひとつせず、てきぱきと片付けるかなを見て、暫しポンと見とれていた。

「息子さんのお陰で少し足の踏み場が出来たかな

「淳也と呼んで下さい。

かんなさんの指示が無かつたら、

僕なんかうろたえて固まつてこますよ

「慣れてなかつたら、誰だつてそつなつてこますよ

「かんなさんて、こんな非常事態なのに、

すぐ落ち着いていますよね

「落ち着いているなんて・・・。

淳也さんて、私の事、大年増のヘルパーだと思つているんでしょう

「ど、どんでもない。

若い人にこんな事までさせて申し訳ないと思っていますよ。

汚い事をさせて勘弁して下せー」

淳也が少し照れながら、頭をぺこんと下げた。

かんなは薄情な家族を仕事を通して数多く見ていた。

「汚い事をさせて勘弁して下さい」

とストレートに言え、熱心に手伝つ淳也に、かんなは不思議なほど好印象を持った。

「汚物は殆ど片付いたわね。

次は雑巾で畳を拭きたいのだけど、淳也さん手伝つてもいいえるかな」「当然、やりますよ。僕にもさせて下せー」

「じゃ、お願ひしようかな」

「そうして下せー」

「淳也さん、少し熱めのお湯をバケツに汲んで下せー」

「了解です」

淳也がお湯の入ったバケツを二人の間に置いた。

「雑巾を少しきつめに絞つて、

先程の要領で両端から中央へ拭いて下さい。

便と尿の付いている所はティッシュとウーリッシュティッシュで拭き取つてからお願ひします」

「了解です」

「それから、雑巾は小まめにお湯で洗つて下さいね」

「またまた、了解です」

二人は一生懸命に畳を雑巾で拭つた。

たえが目をパチクリさせながら、仲良く後片付けをしている二人を交互に見ている。

たえの視線に、かんなは気が付いた。

「吉見さん、もうちょっと待つてね。すぐに着替えさせて上げるから」

「すんまへん。堪忍してや」

「吉見さんたら、気にしなくていいのに」「お袋、もう少しの辛抱だからな」

一人は畳をざつと拭き上げた。

「これで、よし。

吉見さん、新しいおむつをして、着替えをさせてあげるからね」

「ありがとい」

「了解

「淳也さん、吉見さんの体を拭くから、別のバケツにお湯を汲んで下さる。それとタオルもね」

たえの古いおむつはなぜか外れていた。  
それで、便と尿がし放題になつたのだろう。

「淳也さん、あっちを向いていてね」

「了解の了解です」

かんなは便で汚れたたえの着衣を脱がし、便が付いたたえの顔と体を

ウーホットティーシュで拭い去つた。

次に、湯で絞つたタオルでたえの全身を何度も拭き上げた。たえを寝かせて手早くおむつをすると、かんなはネグリジエをたえに着せた。

「まあ、こんな所かな。吉見さん、綺麗になつたでしょ」

「堪忍 ゃ でえ〜」

たえは片手でかんなを拭みながら涙を流している。

「淳也さん、もういいわよ」

淳也はかんなに向かつて拭み泣いているたえを見て、思わず涙が零れた。

「お袋〜。お袋〜。」

「かんなさん本当にありがと〜。」

「そんなん。今まで涙が零れそう〜。」

かんなは涙を流してこる一人を見て、もう泣きをしている。

(この仕事をして良かった)

かんなは腰が慢性的に痛む辛いこの仕事をして、これほど充実感を味わつた事は無かつた。

「淳也さん、吉見さんをベッドに寝かせたいの。また、手伝つてもらえるかな」

「心から了解で〜す」

「よいしょ」

二人は力を合わせてたえをベッドに寝かせた。

「これでOKね」

そう言いながら、かんなが腕時計を見た。

「あつ、いけない。

予定より5分オーバーしているわ。失礼しなくちゃ」

「もう帰るんですか」

「ごめんなさい。次の仕事が待つてるので。

淳也さん、もしよかつたら、仕上げをして下せり」

「特別サービスの了解です」

「ベッドに吉見さんがもたれていたので、便が付いてると思つたの。

まず、それを片付けて

「了解です」

「畳は先程さつと拭き上げているから、  
もう一度丹念に拭き上げて欲しいの。

とりわけ、吉見さんが座つていた所、おむつを替えた所は入念に  
「了解の了解です」

「ドリ、バケツ、雑巾、タオルなどの後始末をお願いね。

あと、換気は良くしてね。

扇風機があれば畳をそれで乾かして欲しいの。そんなもんかな  
「名残惜しい了解です」

「まあ、淳也さんったら……。吉見さん、さよなら

「「」苦勞 やん」

たえはやつ置いて、また片手でかんなを押んでいる。

「また、来るからね」

「かんなさん、玄関で着替えて下せー。」

僕、その間に、雨靴とゴム手袋を水でぬあと洗つて置きますから」

「悪いわ」

「水で流すだけですから、すぐ終わります」

「じゃ、甘えようかしら」

「嬉しい了解です」

「まあ、淳也さんたら」

淳也は急いで水で洗おうと思つて、それらを見た。

「雨靴も、ゴム手袋も、便だらけじゃないか」  
淳也は雨靴とゴム手袋に向かつて頭を下げた。

「感謝の限りです」

淳也は心を込めてそれらを水で洗つた。

「お待たせしました」

「助かつたわ。あら、いやだ。顔にまで付いてるわ  
何が・・・」

かんなはポケットティッシュで淳也の顔を拭いてやつた。

「はー、これつ。ハンサムな顔が台無しですよ」

かんなが便を拭つたティッシュを淳也に渡した。

淳也がティッシュを広げて中を見た。

「急いで洗ったから、雨靴の便が飛び散ったかな。

これで、ウンが付くかも

「どんな運が付くの

「ウンがとりもつ縁で、天使のように優しい人にめぐり逢えたし・・・」

「優しい人って私のこと。淳也さんだって優しいじゃないの。

感動もんよ・・・。

ああ、残念。もういけないわ。

この続きを、またね。じゃ、失礼します

「かんなさん、本当にお世話になりました

かんなは全速力で自転車のペダルを漕ぎ出した。

淳也は直角にお辞儀をし、うしろ姿が見えなくなるまでいつまでもかんなを見送っていた。

「それにしても、優しい人だな

淳也はかんなのケタ違いの優しさに心を打たれていた。

淳也はかんなの言った事を守り、ベッドの便を落とし、畳を丹念に拭き上げ、後片付けを済ませ、扇風機で畳を乾燥させた。

「これで良し。かんなさん、上首尾でしょう」

かんなさんと、名前を口に出すだけで、淳也は今までに無く心がキ

ュンとなつた。

「お袋、綺麗になつただろう。良かつたね

「あり が とつ」

「智子はどうしたんだい」

「外出 や」

たえは妹の智子の家族と同居していた。

「お袋、なぜ、ベッドから落ちたんだ」

「お むつ が 外れ て、左 手で 電話 を 取りう と し

たら、

落ち て し も てん」

「なぜ、こんな状態に」

「便が 出 たん や」

「下でか」

「そ や」

「それで、こんなに散らかしたんか」

「情け のう て、情け のう て・・・。

そし たら 何が 何やら わか ろう なつ て しもう てな

「そつか。そだつたんか。大変だつたな」

「淳也。頼み 事 が あるん や。聞いて くれ るか

「俺に何がして欲しいのだ」

「お ね が い や。私 を 殺し て くれ へん か」

「えつ……お袋を殺す。お袋……」

「そんな悲しい事を……」

淳也は母親の苦しみを知つて、たまらなくなり、号泣した。

「うひ、うひ、うひ～・・・」

「淳也。一生のおねがいや」

「俺が帰つて来た言ひのこ、それはないや。うひ、うひ～

「もひ、みんなに迷惑かけとうないんや」

「親子やろ。迷惑かけたらいいんだ。」

迷惑かけたら・・・う、うん、うひひんん

「後生だから、首を絞めて・・・」

「お袋……ひひひひひ、ひひひひひひ～・・・」

淳也は涙をぽろぽろ零しながら、たえを力いっぱいに抱き締めた。

たえの体は想像以上に瘦せていた。

「淳也。くるしい・・・」

淳也は我に返つた。

「悪い」

淳也は感情が込み上げてきて、たえを抱き締めるのに、力が入り過ぎた。

思わず、淳也是全身から力を抜いた。

たえは目をぱちくりとして、はあははあと大きく息をしてくる。

「殺してくれ」と先程言つたばかりなのに、その言葉とは違つ驚いた表情をたえはしている。

「勘弁しろよ。力が入り過ぎて

「びつくりしたなあ。死ぬかと思ったわ」

「殺す訳ないやろ」

「あんまり驚いたら、お腹がすいたわ。  
何か食べさせてえな」

「殺せの次は、お腹がすいたか。まいったな。ちょっと待ちや」

「ラーメンでもええか」

「それで我慢するわ」

淳也はたえのためにラーメンを作つた。

余りの驚きで、たえはパニックから、やつと落ち着きを取り戻したようだ。

淳也はそんなたえを見て、嬉しくて泣きながら、はしで麺をほぐしていた。

ラーメンの中には淳也の涙がいっぱいに入っていた。

「お袋、出来たで」

「待ち くた びれ たわ」

「涙ラーメン！」上がり

ズルズルズルツ。ズルズルズ〜。

「こん な おい しい ラー メン 生ま れて 初 めて や  
」。

また、作つ てえ なあ」

たえは猛烈な食欲でラーメンをすすつていて。

糞尿だらけで、わあんわあん泣いていたので、余程たえはお腹がすいたのだろう。

ラーメンを無心に食べているたえを見て、淳也は大阪で仕事をする事を決断して、正解だったと確信した。



### 3話 邪魔者

#### 3話 邪魔者

阪急梅田駅に着くと、淳也は偽名の純一に戻った。

母親のたえは、純一の顔を見たせいか、あれ以来驚くほど元気になつていた。

そして、純一を何度も笑わせるほど明るくなつていた。

（かんなさんのお陰だ。また、逢つて感謝を言いたい）

純一はかんなの顔を思い描き、頭を下げた。

マンションに帰つた。

純一は次の標的の情報を頭に叩き込むために、パソコンのスイッチを入れた。

D u c k l i s tを開く。

森下 芳恵  
年齢 32歳  
身長 160センチ  
体重 55キロ?

職業 歯科 医師

年収 1000万円

資産 かなり多い ?

住所 枚方市・・・

家族 父、母、妹の4人暮らし

国立大卒

趣味 映画

性格 のんびり 明るい

結婚歴 無し

男性経験 男はあまり知らない 僕の直感!

携帯 電話番号 090 ・・・・・

純一はduck listの情報を頭に刻んだ。

見合いパーティーから2週間ほど経っているので、芳恵は待ちくたびれて、あきらめかけている頃だらう。

「これだけ待たせば、そろそろいいだろ?」

デスクのパソコンの横には、中ジョッキの瓶の中に100円玉が4分の3位入っている。

公衆電話用に用意しているコインだ。

純一はその中の一枚を天井すぐ近くまで放り上げた。

そして、落ちてくる100円玉を素早く右手で掴むと、それを左手の甲の上に置いた。

「裏だ」

「コインは」これから純一の生き方を暗示するよつて裏を指していた。

「やはり裏か。

裏も表もコインのよつて

裏も表も俺だ！

裏があるから、表もあるんだ

純一はジョッキの中に手を突っ込むと、ザクッと100円玉を齧づかみで握り締めた。

マンションを出ると、純一は近くの公衆電話ボックスに滑り込んだ。

「もしもし、芝です

「ええ、芝さん……」

「ええ、見合いパーティで映画を見に行つてお誘いした、あの芝です」

「ああ、芝さんですか。

私は縁が無かつたと、もつあきらめていきましたわ。  
何か……」

「ああそうでしたか。

わかりました。お電話して申し訳ありません。

それでは、これで、しつ……」

「あ、お待ちになつて。折角お電話下さつたのに。

そんなに慌てなくても。映画のお誘いではなかつたのですか

「実はそうなんです。

電話が遅れたのは、あなたをお誘いする映画が、  
生憎無かつたもので」

「そうでしたか。何かいい映画は『』じやこまして」

「ええ、何とか。『ドリーム・レディ』は見られましたか」

「まあ、『ドリーム・レディ』

私、とりても見たかつた映画ですわ」

「『』都合はいかがですか。

土曜日の午後なら、病院はお休みだらうと思こまして」

「今日ですか」

「ええ。今は2時ですから5時頃、大阪まで出られませんか  
「どうしようかな」

「もうチケットは2枚購入しているのですけど」

「まあ、仕方のない人ね。それなら断れませんわね」

「芳恵さんは、大阪はどの辺りをよく』存知ですか  
「阪急百貨店にはよく行きますので、あの辺りなら」

「その並びにある阪急交通社は』存知ですか  
「よく存じておつますわ」

「では、阪急交通社の前で5時に」

「5時ですね。では、失礼します」

妹の真美恵は姉の電話を盗み聞きしていた。

（あの嬉しそうな顔は何や。  
どうせお見合いパーティで知り合つたろくなしさからの電話や。）  
私は絶対に安売りはせえへんからな）

3歳年下の真美恵は、結婚選びだけは姉には負けたくなかつた。  
姉は小学校から優等生で大学も国立。

妹の自分は、劣等生で医大にも行けず、やつとの事でお嬢さま私立  
大学を卒業。

真美恵は小さい頃から姉と比べられ、劣等感の固まりに育てられて  
いた。

（マスクだけは姉には負けてはいけない。  
この立場を逆転させるには結婚しかない）

真美恵はそう考え、芳恵の結婚相手には、並々ならぬ関心を抱いて  
いた。

電話の内容から、男と今日の5時頃、大阪で待ち合わせをしている  
事を、真美恵はつきとめた。

「つけてやる。どんな男か拝んだるわ」

真美恵は探偵のようにどこまでもつける覚悟でいた。

芳恵は飛び上がるばかりに嬉しかつた。

「僕では駄目ですか」

と言いながら、最終投票には自分を入れなかつた憎い男。

「今度、『』一緒に来ませんか」

と言いながら、2週間も連絡して来なかつた恨めしい男。

あきらめようと思えば思つほど忘れられない男。

その男が芝純一だつた。

芳恵は精一杯のおめかしをして、京阪枚方市駅から淀屋橋に向かつた。

妹の真美恵はつばの大きな帽子で顔を隠し、芳恵をピタツと尾行していた。

淀屋橋から地下鉄に乗り換え、梅田駅に着くと、芳恵は足早に待ち合わせ場所に向かつっていた。

真美恵は人込みの中を必死で尾行を続けていた。

純一は15分前から待ち合わせ場所に立つていた。

（相手がかななならどんなに胸が弾むだらう）

一瞬、そんな思いが脳裏をよぎつた。

「かんなさん勘弁してください」

純一は心の中でかんなに謝つた。

「お久し振りです」

そこに芳恵が現れた。

「お久し振りです。突然、電話をしたので驚かれたでしょう」「いいえ、とても嬉しかったです」

グレーのスーツを知的に着こなしている芳恵が、純一の目を見て咳いた。

二人はシネコンが入っているビルの6階にある食堂街のレストランで食事を済ませた。

そして、8階のレジオシネマコンプレックスへ。

映画が始まるまで、二人は今まで見た感動の映画を話題にして立ち話をしていた。

そこへ、尾行を続けていた真美恵が現れた。

「あらっ、お姉さんやないの。偶然やね。今から、映画・・・」「あっ！ 真美恵。どうしてここに？」

「ショッピングの帰りに映画でも見よつと思てな」「何を見るの」

「『ドリーム・レディ』かな。お姉さんは・・・」「ええっ！ あなたも」

「お姉さんもそなん。偶然つてあるなんなあ」「それより、そちらの人は誰？私にも紹介してえな」

「仕方ないな。こちらはえさん。これは妹の真美恵です」「真美恵です。よろしく」

「芝です。よろしく」

「えらい素敵な人やけど、お姉さんいつたいどこで知りあつたん」「これつ、失礼な事を言つてからに。真美恵はあつちにお行き」

「はい、はい。私は邪魔みたいやから失礼するわ。  
芝さん、ほな、また」

「失礼します」

芳恵は真美恵が去つてほつと胸を撫で下ろした。

（ろくでなしと思つたら、知的でえらい好みのタイプや。  
芳恵なんかに、死んでも渡せへんからな）

真美恵は芳恵に対する敵対心をめらめらと燃やした。

二人は劇場に入り、中央よりやや後方、通路左から3番目と4番目の席に腰を掛けた。

真美恵は一人より斜め後方に席を取つてゐる。  
映画が始まつて15分位すると3番目に座つてゐる純一の横に、ひとりの女性が座つた。

純一が何気なく横を見た。

「あつー。」

純一は思わず小さな声を上げた。  
横に座つたのは真美恵だった。

「」の席空いているみたいやから、私が座らしてもうつわ  
芳恵は真美恵を見て、大きな溜息を付いている。

純一がスクリーンに目を戻した。  
スクリーンでは、黒人女性グループの迫力のある歌と、ゴージャスなショーガ・・・。

その時、真美恵の左手が純一の右手を包むように握った。  
真美恵の手は純一の手を自分の方へいざなつた。

そして、その手は自分のスカートの中へ。

太腿の辺りに純一の手を誘うと、その手はさらに奥の柔肌に押し当てた。

「ええーまさか・・・」

純一はギョッと驚き、思わず自分の手を力ずくで引っ込んだ。

真美恵を見た。

「ウッ、ウフ、ウフツー」

真美恵は暗闇の中で薄ら笑いを浮かべている。

「＊＊」

真美恵が純一に無音で意味深に語り掛けた。

恐らく真美恵は口の動きから、馬鹿と言つたのだろう。

「まいつたな」

真美恵という女の登場は純一の全くの想定外だつた。

「この女は、純一の仕事上、一番嫌なタイプの女だ。

嫉妬心、独占欲が強く、淫乱で、薄情な女。

こんな女に限って、何か事があると、騒ぎ立て、警察にすぐ訴える。

仕事柄いろんなタイプの女を見てきた純一は、真美恵をこう分析していました。

田は映画を見ているが、頭はこの仕事のシナリオの変更を倍速で考えていた。

この仕事を中断するか。

それとも、続行するか。

続行するなら、速攻、縮小に切り替えるか。

純一の考えがまとまらないうちに、映画が終わつた。

芳恵が劇場のトイレに立ち去つた。

真美恵が純一に近寄つた。

「電話番号を教えてくれへん」

「芳恵さんにも教えてないのこ、教える事は出来ない」

「それやつたら、これ渡しておへわ」

純一がメモを見ると、真美恵の携帯の電話番号とメールアドレスが書かれていた。

「必ず、電話してや。きっとやで」  
「・・・」

純一は沈黙しながら、

（腹は決まった。速攻で行くか）  
と、心の中で呟いた。

「お待たせ」

芳恵がトイレから帰つて來た。

「私たちは寄る所があるので、真美恵はひとりでお帰り  
「ひとりにするん」

真美恵は不服だったが、渋々姉の言葉に従つた。

（その代わり、地獄の果てまでつけてやる）

真美恵はバッグの中から帽子を取り出すと、それを深めに被り、一人  
を尾行し始めた。

二人はエレベーターが満員なので、エスカレーターで下へ。

3階に着く直前に純一が振り返つた。

やはり、上方に真美恵の姿があつた。

真美恵が尾行しているのに気が付くと、純一と芳恵は3階で降りる  
やい  
なや、近くの店に身を潜めた。

別のエスカレーターで上に上ると、一人は6階の喫茶店に入った。ウェイトレスがコーヒーをテーブルに置いて、去つて行つた。

「真美恵さんがつけていますが、あれは家からですね」

「ええ、そんな・・・」

「間違いありません」

「真美恵は何を考えているのでしょうか」

「映画を見ている時、真美恵さんは僕の手をスカートの中に入れました」

「えっ！ そんな事までするのですか」

「それだけではありません。

あなたがトイレに行つている間に、僕に電話番号を教えると迫りました。もちろん、断りましたが」

「あの子つたら・・・」

「断れば、このメモを」

そう言って、純一は真美恵が書いたメモを芳恵に渡した。

メモには真美恵の名前と携帯の電話番号、メールアドレスが書かれている。

その筆跡は芳恵には確かに見覚えがあつた。  
真美恵が書いたものだつた。

「僕は芳恵さんを裏切る気持ちはありません」

そう言つと、純一はテーブルに置かれているメモを取り、それを粉々に破つた。

芳恵は自分より美人で若い真美恵に乗り換えることなく、  
「裏切る気持ちはありません」と、言い切る純一に深い慈しみを感じた。

(この人は信頼できる人だ)

芳恵は、そう確信した。

「真美恵さんのためにも、  
早く一人の仲をはつきりさせないといけませんね」  
「そうですね」

「したくても、今の僕にはそれが出来ないのが残念です  
「どうして出来ないのでですか」

「それは・・・  
「どうしてですか」

「それを片付けてからあなたの仲をはつきりさせようと思つていたので・・・

「言って下さい」

「実は・・・実は友達の借金の連帯保証人になつていています。

友達は事業が失敗すると失踪してしまったのです。

それで、借金は僕が・・・」

「幾らあるのですか」

「500万円の内、300万円は返して、  
後200万円残っているのです。

サラ金なので早く返さないと・・・」

純一は最初、報酬は芳恵の年収1000万の半分を考えていた。  
シナリオ変更で200万に削減したのだ。

「なんだ。200万円か。

それ位なら私の小遣いの範囲内で何とでもなりますわ

「とんでもない。あなたにはお借り出来ませんよ」

「心配なさらないで。それ位なら私がご用立てしますわ

「それはいけません。話さなければ良かつたな」

「私に払わさせて下さい。

これは、真美恵に乗り換えず、

女のプライドを守つて下さった私からのお礼です

「それは当たり前の事ですから」

「お願いします」

「そこまで言われるのなら、甘えてもいいのじょつか

「どうぞ、そうして下さい。

次にお逢いする時にお金はお持ちしますわ

「ありがとうございます」

芳恵は、純一だけは何としても真美恵に奪われたく無かつた。

（真美恵は子供の時から自分の物を欲しがる癖があつた。

おもむやとは違うのよ）

200万円はその為の保証金。

純一みたいな男とは、もつ一度とめぐり逢う事は無いだろ？

そんな男をこんなはした金で引き止められるなら、返つてこなくても、芳恵は少しも惜しくは無かつた。

（これで女のプライドが保てるわ）

芳恵は喜んで200万円を用意するつもりでいた。

次の土曜日、純一は芳恵に電話を入れた。

「もしもし、えです」

「はい、芳恵です。

あら、おさん、先日はこうこうとありがとうございました」

「明日の日曜日は都合はいかがですか」

「ええ、大丈夫です」

「大丈夫ですか。ところで、近くには真美恵さんはいませんか」「いないみたいですね」

「どこかで聞いていても限りませんから、

芳恵さんは、はいといえだけで答えてもらいますか」

「わかりました」

「2時で時間はいいですか」

「はい」

「場所は前の所で」

「はい」

「明日を楽しみにしています」

「私も楽しみにしております」

「では、わよひなら」

「失礼します」

芳恵は心が浮き立つた。

土曜日に電話がかかる予感がしたので、芳恵は200万円を昨日のうちに用意をしていた。

（芝に思い切り抱き締められたい）

芳恵は32年の歴史の中で一番ときめき、輝いていた。

真美恵はあれから1週間、ずっと携帯電話を眺めていた。

必ず、芝は電話をしてくると思っていたのに、電話は掛かって来なかつた。

（何でや。私の方方が芳恵よりもずっと美人や。体つきやスタイルも絶対に負けてへん。せやのに、何で電話をせんのや。や。

あほー！芳恵を選んでみー。殺したるー。)

ガツチャン。

芳恵の「コーヒー カップ」を真美恵は思い切り床に叩き付けた。

「コーヒー」の飲み残しと割れた「コーヒー カップ」の破片が床に散乱している。

真美恵は荒れに荒れていた。

日曜日。

朝から芳恵は真美恵の動きに細心の注意を払っていた。

真美恵がトイレに入ると、普段着のまま大急ぎで芳恵は家を出た。

紙袋の中にお気に入りの服を入れ、後で着替えるつもりにしていた。

梅田に着くと、芳恵は着替えを済ませ、普段着をコインロッカーに預けた。

途中、何度も振り返つたが、真美恵はつけていなかつた。

12時前に梅田に着いたので、芳恵は食事やウインドウショッピングで時間をつぶした。

芳恵が待ち合わせ場所に行くと、芝はすでに来ていて、芝の腕には、ショッピングバッグがぶら下がっている。

「お待たせしました」

「いいえ、僕も今来た所です」

そう言つて、純一は真美恵がいないか左右をキョロキョロ眺め回した。

「今日は大丈夫だと思います。用心してまいりましたから」「ああ、そうでしたか。それは、良かったです」

「今日は芳恵さんと二人つきりで映画を見ようと思つて いるんですよ」

「えつ、二人つきりで映画を」

「ホテルで映画を見るんですよ。ワインを飲みながらね。と言つても、絶対に何もしませんから」

「ホテルで映画ですか。で、何を見るんですか」

「僕、いち押しの作品です。楽しみにして下さい」

「わかりました」

「いいですか」

「私は構いません事よ」

二人は待ち合わせ場所からすぐ近くの新阪央ホテルへ。

純一はフロントで予約したエグゼグティブ・ツインの部屋のキーを受け取った。

「この部屋は広いんですね」

「40平方メートル以上ありますかね」

一人はテーブルを挟んで椅子に座った。

忘れない内にお金をお渡ししますわ。

支那の歴史と文化

「前にも言いましたように、

モルヒネ

「借用書は？・・・」

「そんなもの必要ないぞ、用意せんわ。我礼ですから」

「ありがとう」「やったね」

純一はショッピングバッグの中から皮のバッグを取り出し、お金をその中に入れた。

(今度は「じあら」がお礼をする番だ)

純一は心の中でそう呟くと、ショッピングバッグの中からDVD、ワイン、紙に巻いた特製のワイングラスを取り出した。

そして、テーブルの上に置いた。

「僕のお勧めの映画は『華麗なるワニ・シリー』

1970年代に作られた1作目と最近もう一度制作されたりメイク

版の2作なんですね

「タイトルだけは知つておりますわ」

「2作続けて見ると、中々興味深いですよ」

そう言つて、DVDプレーヤーにリメイク版をセットすると、純一はテレビの前に椅子を2つ並べた。

映画が始まり出した。

純一はドイツ製の白の最高級アイスワインを長く細めのワイングラスに注いだ。

トクツトクツトクツ。

ワインのここ香りが辺り一面に広がった。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

芳恵はひと口、口を付けた。

「まあ、何でおこしこの。トロリと甘く、もうやかで芳醇。こんなワイン、私生まれて初めてですわ」

「それは、良かった。いい映画には、いいワイン。どちらも心ゆくまで楽しんで下せー」

純一はリメイク版が終わると、続いて1作目をセットした。1920年代のアメリカ。

上流社会の女を愛した男の野心と純愛を描いた名作を、一人はソフ

アーベ並べて楽しんだ。

「2作品を続けて見ると、興味深いし、良くわかりますね。私はめがねの看板が印象的でしたわ。・・・・・」

二人は1作目と2作目の違いや描き方について、長時間に亘って語り合つた。

そして、よく笑い、ワインの瓶を一人で空にした。

「こんなに男の人と語り合つたのは初めてですわ」

「僕もこんなに話が弾むとは思わなかつたな。

映画つて本当にいいですね」

そう言いながら、純一がショッピングバッグの中に手を入れた。

「芳恵さんに、これをプレゼントします」

「これは何ですか」

「僕からのお礼です。開けて下さい」

「何かしら。まあ、何て素敵なの。カメオのペンダント。頂いてもいいんですね」

それは、花をモチーフにしたフランス製のカメオのペンダントだった。

「これは僕のほんの気持ちばかりのお礼です。ぜひとも、受け取つて下さい」

「嬉しい。今日は何て素晴らしい日なの。このワインのようにとろけそうな一日でしたわ」

「そんなに喜んでもらえれば、光栄です  
「本当にありがとうございます」

純一が帰り支度を終え、部屋を出ようとしていくと、芳恵の粘り付  
くやうな視線に気が付いた。

「本当に何もして下さらないのですか」

「ええ、何もしないと約束しましたからね」

「私つてそんなに魅力がございませんの」

「そんな事はありませんよ。

だけど、今日は僕の我ままにさせて下さる」

「そんな約束なんか、破つて下さればいいの?」

「仕方がございませんわ」

二人は沈黙のままホテルを出た。

純一は地下鉄御堂筋線の梅田駅まで芳恵を送った。

その間、芳恵は一言も語らなかつた。

芳恵は改札口と通ると心なしか寂しそうに去つて行つた。

(深い関係になると、もつともつと辛くなる。勘弁しちゃ。。。  
本当にありがと。元気でな。

妹の真美恵には気を付けなよ。じゃあな)

純一はちよびり不満そうな芳恵の背中に向かつて、心の中で呟いた。

この瞬間から、純一は芳恵の前から姿を消した。

芳恵はカメオのペンダントを見ながら涙を流していた。  
涙が次から次から頬を伝づ。

まるで泉のように、涙が体の奥から湧いて来る。  
芳恵の目は少し腫れていた。

純一から1週間以上連絡は無かつた。

もう、電話は掛かつてこない予感が、芳恵の胸を張り裂いた。

「あの時、なぜ抱いて下さらなかつたの」  
「電話はなぜ下さらないの」  
「真美恵の事が原因なの」

芳恵が幾ら質問をしても、答えは返つて来なかつた。

芳恵は、突然姿を消した純一が忘れられなかつた。  
恋しさと切なさの余り、芳恵は純一を恨みがましく思つていた。

しかし、警察に訴える気は髪の毛の1本も無かつた。



「帰らんとつて。」

帰  
つ  
た  
ら  
い  
せ  
「

淳也の母のたえは、ヘルバーのかんなの手を左手で掴んで離さなかつた。

「お願いや。ひとりにせんとつて  
「許してね。また夜に来たあげるね」

かんなはたえの手を優しく離した。

すると、たえはめぞめぞと泣き出した。たえの田から、ポートン、ポートンと涙が落ちる。

たえの顔は鼻水と涙でぐちゃぐちゃになつてゐる。

「嫌だわ。吉見さんたちつ

かんなはたえの顔をティッシュで拭いてやつた。  
そして、かんなはたえを抱き締めて、頬をすり付けた。

「じゃ、帰るね」

「・・・」

かんなは次の仕事を終えて、夜にまた子供を連れて来ようと思つていた。

「失礼します」

「(1)苦労様」

玄関口で淳也の妹の智子がかんなに挨拶をした。

智子は母の長期の看病で心身共に疲れていた。

智子は母と一緒につくりで顔をつき合わせていると、時々、発狂しそうになつた。

それで、気晴らしに、京都や大阪でショッピングをして、智子は憂さを晴らしている。

(母の事は出来るだけヘルパーに任せよつ)

智子は最近、そう考えるようになつていたのだ。

純一は仕事を終えたので、また母親に会いに行く為に阪急梅田駅に向かっていた。

電車に乗り、座席に座りながら、純一は今回の仕事を振り返つていた。

（真美恵の登場は全くの想定外だつた。

速攻に切り替えて正解だつたかな。欲を出せば、危ない所だ）

純一は短期に事が運び、ほつと胸を撫で下ろしていた。

（かんなさんに、また逢えるだろつか）

母親の顔を見るために大阪で仕事をするよつになつていたはずなのに、い

つしか目的が変わつていた。

純一は電車のスピードを遅く感じながら、母親のいる実家に向かつていた。

かんなは仕事を終え、食事を済ませると、子供の勇太と自転車で8時頃にたえの家に来た。

「吉見さん、また来たよ」

そう言つて、かんなはたえの部屋に勇太を連れて入つて來た。

「あり が とう。あり が とう」

「吉見さん、今日は子供の勇太を連れて來たよ。勇太、ご挨拶は

「こんばんは」

「お 利 口 さん や な」

「お い く つ」

「5才」

勇太は片手を広げて元気に言つた。

「吉見さん、淳也さんの勇太位の時つて、どんな子供だったの  
「淳也　かい。寝 小便 ばか り し とつ た わ

「寝小便？ まあ、吉見さんたら  
「何て 言い 訳 し た か 当て て み

「もつしませんかな

「い い や

「何で、言つたの。吉見さん

「そ れ は な

「吉見さんのがず

「言つて あげ よ か

「吉見さん、お願い。早く言わなこと、もう来ないわよ

「よつ しや。 淳 も は な

「何て、言つたの」

「ちんちん汗かいた」　ちんちん汗かいた　言つてな

「ちんちん汗かいた」と言つたの。まあ、淳也さんたら

かんなはそれを聞いて笑い転げた。

(あの素敵な淳也さんが、そんな事を言つなんて、想像出来ないわ  
淳也の顔を思い描くと、かんなは可笑しくて可笑しくて笑いが止ま  
らなかつた。

「とうがらしみたいなちゃんちゃんやで。  
それが、汗かいて、ふとんに地図描ける  
訳無いやろに」

そう言つて、たえまで大笑いしている。

そこへ、淳也が帰つて來た。

そして、淳也が澄ましてたえの部屋に入つて來た。

たえとかんなは顔を見合わせると、また笑い転げた。

「何や、人の顔を見てそんなに笑うなんて、失礼じゃないか」

「あつ、寝小便のおっちゃんや」

話を聞いていたのか、勇太までそう言つと、たえとかんなはまた笑い出した。

「寝小便のおっちゃんつて、おじさん的事か」

「そうや。おっちゃん、ちんちん汗かいitanか」

「これ、勇太。駄目よ。『免なさい、淳也さん。』

いま、吉見さんに淳也さんの子供の頃の話を聞いていたの「寝小便の話だろ。お袋、頼むよ。変な事は言わないでくれよ」

「ええやないか。今の話やないんやから」

「今する訳無いだろ。まいつたな。もう帰つてやらないぞ」

4人は寝たきりの病人がいる事も忘れ、笑いながら楽しく語り合つた。

「ようわるたわ。今日は樂しかつたわ」

「こんなに樂しそうなお袋の顔を見るのは何年ぶりだろ。」

みんな、かんなさんのお陰です

「私は何も。吉見さんって、すゞしく面白いの。  
私可笑しくって、涙が出たほどです」

「良かったな。お袋。ありがと、かんなさん」

「いいえ。あつ、いけない。

もう、こんな時間だわ。帰らなくちゃ」

時計は9時を過ぎていた。

「かんなさん、遅いから、僕が送つて行きます  
「送つてもらわなくても、結構ですよ」

「いえ、送らせて下さい

「送つてもらい

「じゃ、そうしようかな

「そうして下さい」

大枝南福西町のたえの家から、大枝西新林町のかんなの住む市営住  
宅まで、自転車で約10分ほどの距離だった。

「眠たいよ~」

眠気が催したのか、勇太がしきりに手の甲で擦っている。

「困ったな。これじゃ、勇太は自転車で帰れないわね

「僕がおぶつて行きます」

「えつ、淳也さんが。歩けば大分ありますよ」

「大丈夫です」

「申し訳無いわ」

「そうぞして下さい」

「じゃ、甘えてもいいかしら。

勇太の自転車はここに置かせてもらつていいですか」

「どうぞ、どうぞ」

淳也は勇太を背中に背負つた。

かんなは自転車を押して、二人は並んで歩き出した。

「わあ、すげえ高いや。ママ！見て見て」

目を擦つていた勇太は、淳也の背中の上ではしゃいでいる。

「今度、3人で遊園地に行きたいな

「連れて行つてやる」

「ほんと、寝小便のおっちゃん」

「これ、勇太。謝りなさい」

「（）免なさい。おっちゃん、でも、約束やで」

「ああ、約束だ」

「やつた～。わあ～い、わあ～い

「いいんですか」

「男の約束です。

ユニバーサル・ムービー・ジャパン  
U M J

「3人で行きましょ～」

「良かつたね、勇太。この子つたら、現金ね。  
もう、スヤスヤ眠つてゐるわ

「安心したのでしょうか」

「U.M」は、私、まだ行った事無いの。一度、行つて見たいと思っていたから、私も楽しみ

「それは、良かつた。楽しみにしていて下さい」

「淳也さん、勇太、重くありません」

「大丈夫です」

3人は和やかに語らいながら歩いていた。

「私が住んでいる団地が見えて来たわ」

「あの前の団地ですか」

10棟位の5階建ての建物群が前方にそびえている。

「やつと、着いたわね。淳也さん、重たかつたでしょ」

「大丈夫です」

3人は団地の入り口を入り、かんなの住む8棟の入り口に向かつた。入り口の階段にひとりの男が座つていた。

かんなの前の夫の前崎孝太だった。

「えらい、遅かつたやないか」

「何の用」

「立ち話も何やから、中で話そうやないか」

「私はあんたなんかと話しなんか無いわ。

もう、あんたとは赤の他人や。

話があるのなら、ここで話して」

「そやから、その関係を元通りにしようと言つてるのやないか」

「私はそんな気、全く無いから帰つて」

「勇太の事を考えたれや。も「ひき小学校やで」

「今頃、何を勝手な事を。その勇太を捨てたのはあんたや」

「あれは、ほんの浮氣や。本気や無いのはわかつとひや」

「も「ひ、あんたとは離婚が成立してゐじやないの。」

「私たちの事はほつといて」

「そんなもんぢてでもなる。も「ひ一度やり直そ「ひ」

「私はそんな氣無いから、早く帰つて」

「さあ、頭を冷やして中で話そ「ひ」

「そ「ひ」と、前崎はかんなを家の中に引き摺り「ひも「ひ」と、かんなの手を無理やり引っ張つた。

「止めて。淳也も「へん」

「その手を離して下せ「ひ」

「何や、お前は。関係無いやる。引っ込んでろ」

「その人は、私の婚約者や。これで、わかつたでしょ「ひ」。わかつたら、早く帰つて」

前崎は淳也を見て、かんなの手を離した。  
かんなは淳也のそばに走つて行つた。

「かんなさん、勇太君をお願いします」

「はい、わかりました」

淳也は背中の勇太をかんなに渡した。

「お前ら、こいつからや」

「あつと、前からよ

「もつ、出来てるんか

「それやつたら、何が悪いの。あんたには関係無いやん

「」の野郎、俺の女に手を付けやがって

「もつ、あんたの女じや無いわ

「つるせえ

前崎は淳也の胸倉を鷲掴みにした。

「止めて下さい」

淳也は腕に自信があつたが、前崎と戦つ気は無かつた。  
万一、怪我でもさして、警察沙汰になる事を恐れたからだ。

「ふざけやがつて」

前崎は淳也の胸倉を、さらさらきつつく締めた。

「止めて下さい」

「」の野郎、俺の女に手を出しゃがつて

そう言つと、前崎は淳也の顔面を拳で思い切り殴り付けた。

ガツン。

強烈な一撃。

淳也は思わずよろけた。

情容赦なく、もう、一撃が。

ガツーン。

淳也の唇の辺りが切れて、血が流れた。

ガツツーン。

次の、強烈過ぎる一撃で、淳也は崩れ落ちた。  
倒れる淳也のみぞおち辺りを、前崎は右足の靴の先で力任せに蹴り  
上げた。

גַּעֲמָנִים

淳也は余りの痛みに悶えた。

その前に、淳也は顔面と頭を咄嗟に両腕でガードした。

ブシツ。

蹴りの鈍い音がした。

גַּעֲמָנָה

「止めて～。止めないと、警察を呼ぶわよ」

かんなは携帯電話を今にも警察に掛けるしぐさを見せながら、大声を上げた。

「畜生！意氣地のねえ野郎だ！」

前崎は警察という言葉に反応したのか、淳也を蹴るのを止めた。

「母親なら、少しば勇太の事を考へろ。」

捨て台詞を残して、前崎は去つて行つた。

「淳也さん、大丈夫。まあ、ひどい怪我だわ  
「僕なら、だい、大丈夫です」

家に入つて手当てをしなくちや  
「大丈夫です。これで、帰ります」

「駄目よ。手当てをしなくちや。  
私のためにこんなになつたのに。私に手当てをさせ  
「すみません」

かんなは勇太を背負い、301号室の自分の部屋に淳也を連れて行  
つた。

3人は部屋に入つた。

かんなは淳也の左の脇と脣の止血をし、そこにはバンデエイドを貼つ  
た。

「みぞおちと腕を蹴られたようだけど、大丈夫  
「大丈夫です。普段から鍛えていますから」

「腕をめぐつて見せて」  
「うわあ、青くなつているわ  
「これ位なら」  
「トレーナーを着ていて良かつたわね。  
さつきは、淳也さん、ご免なさいね  
「何をですか」

「私が淳也さんの事を婚約者つて言つたでしょ。う。  
ああでも言わなければ、前崎は引き下がらないと思つたの。

許してね

「僕は嬉しかつたです」

「ええ、本当だ」

「本当です」

「こんな、子持ちでもいいの」

「僕はかんなさんの家族になれたらいいな、と思つていましたから」

「私の家族に…… 本当に本当」

「本当に本当に本当です」

かんなは感激して、胸が熱くなつた。

(かんなさんの家族になれたらいいな)

(何て、素敵なお言葉なの。これって、プロポーズなのかな)

かんなは嬉しくて、淳也の胸に飛び込んだ。

「いっててて。今日は勘弁して下せ」

淳也はみぞおちの辺りを押されて、思わず呻き声を上げた。

「あらっ、『免なさい』。

私ったら、嬉しさのあまり、

淳也さんが怪我をした事を忘れていたわ

「ああ、みぞおちの辺りがズキズキ痛む

「淳也さん、服を持ち上げて。見て上げるわ」

「わかりました」

「あら、すうじいあざになつてゐるわ。

病院に行つた方がいいのじやない」

「少し、様子を見てみます。

じや、こんな状態ですから、僕はこれで失礼します」

「ひとりで帰れる」

「大丈夫です。何とか、帰ります」

淳也はみぞおちの辺りを押さえながら、帰つて行つた。

（3人が家族になれば、どんなに素晴らしいだらう。でも、待つてよ。

勇太がパパの事を寝小便のおっちゃんと言つたりして・・・）

そう考へると、かんなは「と吹き出した。

淳也が歩いて家に着く頃には、みぞおちの痛みは少し楽になつていた。

淳也は上半身を裸になり、洗面所の鏡に蹴られた辺りを映していた。

「大分あざになつてゐるが、これ位なら大丈夫だ」

そこに妹の智子が現れた。

「あら、兄さん。怪我をしているけど、喧嘩でもしたの

「ああ、ちょっと」

「ヘルパーなんか送らなくていいのに、余計な事をするからよ」

「もう、いっぺん、言つてみる」

「何度も言つて上げるわ。余計な事をしなくていいのよ

「お前がお袋の事を何もしないから、仕事以外の時間まで、

あの人があ袋の世話をしているのと違うのか。

送るのは当たり前だ

「何よ。私が何もしないだつて。

私がどれだけくたくたになつて介護したのか、何も知らないくせに  
「以前はそうかも知れない。

しかし、最近はお袋から逃げているのじやないか

「くたくたに疲れたのよ。

夫だつてこんな環境がいやになり、

最近では家に帰つて来なくなつたわ。

みんな、母さんのせいよ・・・

そう言つて、智子が泣き出した。

「母さんのせいにするな

「何よ。兄さんなんて・・・」

智子は涙で言葉にならない。

「・・・母さんのせいで・・・

「母さんのせいで私の家庭は崩壊してゐるよ

「・・・」

「兄さんはいつたい何をしたと言つの。

みんな、私に押し付けてばかりじやないの。

私は気が狂いそうなのよ」

「何を」

「ギヤアアアアアアアアアア～～～

智子が悲鳴とも呻き声ともわからぬ奇声を上げた。

淳也は智子が気が変になつたかと心底驚いた。

リーン、リーン、リーン・・・。

その時、居間の電話の音が鳴つた。

「はい、吉見です」

淳也が電話を取つた。

「お願いや。私を殺して。  
淳也、お願いや、首を絞めて」

電話を掛けたのは、母親のたえだつた。  
枕元の携帯電話から電話をしたのだろう。

「お袋！」

電話の主がたえとわかると、淳也はたえの部屋まで走つて行つた。

智子も電話の音で我に返り、淳也の後を追い掛け行つた。

「私のせいや。私がみんな悪いのや。  
堪忍してや」

たえは一人を見ると、頭を深々と下げた。

「これが精一杯や。  
土下座もでけへん。」

「情無いなあ」

そう言つて、たえは顔をゆがめて泣いている。

「お袋、大きな声を出して許してくれ」

「母さん、『ご免な。こんなに苦しめて』

智子はたえに謝りながら、涙を流している。

「私のせいでの、兄弟喧嘩はやめて。  
お願いや。胸が苦しうなるわ」

「俺が悪かった。金輪際、智子とは喧嘩はしない。  
二人に誓つよ。智子、許してくれ」

「喧嘩を売つたのは私の方よ。兄さん、『ご免ね』

「智子、許してや。  
病院か施設に入れてくれたらええで」

「母さん、私が悪かったわ。

一番苦しいのは、母さんやいう事忘れていたわ」

「仲直り出来て嬉しいわ。  
淳也、頼みがあるねん」

「また、首を絞めてとでも言つつもりか  
いいや。ラーメンが食べたいねん」

「脅かすなよ。頼みがあると言われるとドキッとするよ。  
ラーメンか。よし、飛び切りうまにやつを作つてやる  
「」

淳也はラーメンを3杯作った。

「淳也のラーメンはおいしいねん。」  
智子も食べてみる。

「いただきわ」

二人は仲良くラーメンをすすっている。

たえは子供のように、ラーメンを嬉しそうな顔をして猛烈に食べている。

「うまいなあ」

おこそうに食べるたえの顔を見ていると、淳也は幸せな気分になつた。

二人を見ながら、淳也もラーメンをすすつた。

「あつ、いててて~」

先ほど、殴られた唇の辺りが、ラーメンを食べるとヒリヒリする。

淳也はみどおちに皿をせつた。

蹴られた傷より、寝たきりのたえを持つ心の傷の方が、淳也には何倍も何倍も痛みが大きかった。



## 5話 失敗

5話 失敗

淳也から偽名に戻った純一は、マンションでパソコンを見ていた。  
Duck Listを開き、ひとりの女性のプロフィールを画面に映し出す。

花岡	麻由美
年齢	52歳
住所	神戸市・・・
学歴	高卒
身長	158センチ
体重	58キロ?
未亡人	6ヶ月まえに夫を癌で亡くす

生命保険 60000万円 本人の証言

職業	無職	生活は遺族年金
家族	ひとり暮らし	娘がひとり 結婚して別居 本人の証言
趣味	海外旅行（主に娘と）	
電話	090	・・・・・

この獲物は前の住所のもので、淳一が別の見合いパーティーで知り合つたものだつた。

麻由美は亭主を無くして6カ月位だったのでもう少し寝かせてから、純一は仕事をするつもりでいた。

(まもなく1年だ。そろそろいいだらう)

ワインと同じように、獲物にも、寝かせた方がいいものもある。純一はジヨックの瓶に手を入れ、100円玉を片手いっぱいに握んだ。

「もしもし、芝です。

6カ月程前に見合いパーティでお逢いした、芝生の芝です」

「ああ、思い出しましたわ。芝生の芝さんね。

よく、覚えておりますわ

清掃のパートをしていた麻由美は、掃除機の先を下に落とした。麻由美は普段の喋り方をよそ行きに替えて、気取って電話の応対を始めた。

「1回人を無くされて、1年ほど経ちますが、もう大分落ち着かれましたか」

「まだまだ、ですねん・・・いや、ですのよ。

でも、少し慣れて来ましたわ」

「それは、良かつたです。

一度、お食事でもと思い、お電話を差し上げたのですが、

明日、土曜日の1回合はいかがですか

明日は都合よく清掃の仕事は休みだつた。

麻由美は猫なで声で電話を続けた。

「明日の午後なら都合が良くてよ。夕方からは予定がありますが清掃の仕事が休みの土日、麻由美は回転寿司のパートの仕事を夕方からしていました。

「それなら、12時。阪急三宮の駅前の広場で

「あそこなら良く存じていますわ。

じゃ、明日12時。楽しみにしていますわ

「それでは、失礼します」

電話が終わると、麻由美は携帯電話を握り締め、腕を大きく手前に引いた。

「よつしゅ

麻由美は仕事を中断してトイレに行くと、自分の顔を鏡に映した。

「どうや、私も捨てたもんやないやろ。16歳年下のええ男やで。これやから、お見合いパーティはやめられんのや」

麻由美は50歳の頃から、お見合いパーティに足繁く通つようになつていた。

目的は2つ。

1つはパートの仕事から拾い上げてくれる頼りがいのある結婚相手を捜す事。

2つめは年下の素敵な男性と燃えるような恋をする事。

その為に、麻由美はお見合いパーティが始まる前に、相手をやつと

物色し、どうひらするかを決めていた。

あの時は2つめ。

狙いは芝生の芝、ただひとり。

プロフイールは、1つめと2つめでは替えていた。

若い獲物は9000万円という餌に引っ掛けた。  
あとは、釣り上げて、料理をするだけ。

焼くか、煮るか、刺身にするか。

ピチピチ跳ね回る魚をよだれを垂らしながら、頂くとするか。

(つまこやんなあ)

麻由美は思わず生睡を、ゴクンと飲み込んだ。

土曜日の阪急二宮駅前広場は、いろんな若者がたむろしていた。  
朝から晴れ。

2つのバンドが路上ライブを代わる代わる繰り広げている。  
純一は待ち合わせ時間の10分前から、プロ顔負けの演奏を聞いていた。

「お待たせ」

「今来た所です。食事は何がいいですか

「お任せしますわ」

(あれつ、同じじゃないか)

純一は麻由美の服装が、1年前のお見合いパーティーの時と同じ事に気が付いた。

紺色の地にピンクの花柄のワンピース。そして、真珠のネックレス。

（少し変だ。

9000万も持っている女が前と全く同じ服装をするものなのか。余程、おしゃれに無関心か。それともけちけち女か）

純一の勘が黄信号を灯した。

純一が近くのホテルの中華料理店『CHINA CHINA』に麻由美を連れて行つた。

二人は海鮮飲茶コースを頼んだ。

暫くすると、海鮮入り冷菜盛合せを黒のチャイナドレスを着たウエイトレスが運んで來た。

それを摘みながら、純一が言った。

「これなかなか、うまいですよ」

「本当、おいしいですわ」

次に、ふかひれスープ、続いてエビのチリソース、飲茶・・・が。デザートを食べながら、純一が麻由美に尋ねた。

「海外旅行には行かれましたか？」

「最近、ハワイに行つて来ましたわ」

「ハワイは何度目ですか？」

「2度目ですわ」

「アラモアナには行かれましたか？」

「それ、何ですの」

「ノースショアはどうでした？」

「さつぱり、わかりまへんわ」

「じゃ、ハワイのどこに行かれました？」

「ワイキキですやん」

「それ以外は？」

「ビーチですやん。海ばかり行つてましたわ」

（この女はハワイには行つていない。）

そして、都合が悪くなると、この女の会話には関西弁が入り出す。  
と言つ事は、この女は普段は関西弁で喋つているのか

「そんなことより、折角ホテルまで来ている事だし、  
中に入つて楽しんで行きません」

「今からですか」

「そうよ。たつぱりと可愛がつて上げるわよ」

（この女は嘘で固めている。）

と言つ事は、生命保険金の6000万も

遺産の3000万も嘘か。

道理で、金の事を自分からべらべら喋つていたな。

あんな情報を鵜呑みにするなんて

俺も焼きが回つたかな。

金の無いババアなんか

引っ込んでいやがれ（）

「何を考えてるの。考える事なんかないじゃないの。

早く行きましょう」

「今日は駄目なんだ」

「どうして」

「喧嘩をして腹を蹴られて痛むのだ。顔にも傷があるだろ？」

「本当ね。だけど、残念よね。」

「またにしてくれ」

「ユウは大丈夫なのでしょ？」

麻由美は椅子をずらすと、純一の股に手を這わせた。

「やめないか」

「痛くないよ？」

「いい加減にしろ」

純一は椅子から立ち上ると、勘定を麻由美に任せ、ひとりでエレベータに乗った。

そして、閉じるのスイッチを素早く押した。

「待つてよ」

その声を遮断するように、エレベータの扉が閉まつた。

純一はこの瞬間から、麻由美の前から姿を暗ました。

情報収集の甘さを、純一は反省していた。

（本人の証言には、とりわけ用心しなければ）

気を取り直して、純一はパソコンのduck

listを開いた。

本多 美和子	
年齢 60歳前後	
身長 150センチ位	
体重 55キロ位	
株 多数保有	西和証券にて知り合いに
以下、不明	

純一は見合いパーティに加えて、証券会社の窓口、キヤバクラ、クラブなど、金を持つていそうな女がいる所で獲物を捜していた。

本多 美和子とは西和証券で何度か会い、良く話をするようになつていた。

純一は美和子の事を頭に描き、阪急梅田駅の近くにある西和証券に向かつていた。

純一が西和証券のパソコンで株の動きを見ていると、女が声が掛け

て來た。

「どう、儲かってるか」

声の主は美和子だった。

「なかなか難しいですね」

「やけど、色氣のある株やなあ。ああ、震い付きたいや～」

美和子がパソコンの画面を見ながら言った。

「えつ、何といつ株ですか」

美和子が純一の耳元で息を拭き掛けるよつに囁いた。

「あなたの事やがな」

「ほ、僕が色氣のある株ですか」

「そや、あなたは、女をくいへりひとせせる色氣のある株や。女の人生を暴落させる危険な香りはするけどな」

「・・・」

「そや、つちがいつから間違いないわ」

「そつですかね」

「あんたに頼みがあるねん」

「何ですか」

「つちと夢のよつなパートをしてくれへんか」

「夢のよつなパート」

「つちにほ夢の一口や。」

その代わり、お礼に投資資金を用立てたるわ

「投資資金つて」

「そやな。300万円出したるわ。

それだけあつたら、ひと勝負できるやう」

「まあ、そうですね」

「ぢや、うちどЃトートをしてくれるか」

「いいですけど」

「よつしや。そしたら、決まりでええなあ

「ええ」

「そしたら、この証券会社の前で明日の11時30分でやります  
「わかりました」

話が決まると、純一は先に証券会社を出た。

(夢のような)「データ」とはいつたいどんなデータだ)

(60歳位の女に震い付かれたらかなわん)

あれこれ考えながら、純一は自宅のあるマンションに戻った。

あくる日、純一は11時30分丁度に証券会社の前に行つた。  
美和子はすでに来ていた。

手に一泊旅行でも行くよつな大きなバッグを持つてゐる。

「遅かつたな。もう、けえへんかと思つたわ」  
不満そうな顔をして、美和子が口を開いた。

「今が11時30分ですよ

「まあ、ええわ。ほな、行こ」

「どこに、行くのですか」

「ちょっと早いけど、リッチに食べに行こ。ついで」  
そう言って、美和子が純一と腕を組んだ。

「梅田のど真ん中で腕を組むのですか」

「ええやんか。

これが、うちの夢のようなデイトのスタートや。  
大阪中の人間をびっくりさせたいんや」

行き交う人が驚いて振り返っている。

(どんな関係や)

(若いくせに、あの男は物好きやなあ)

そんな声が、純一には聞こえてきそうだ。

美和子の今日の服装は、お腹が突き出た黒の長めのスカート。  
そして、黒っぽいブラウスに豹柄のベストを羽織っている。

首には、キンキラキンの長くて太いネックレス。

純一が目を覆いたくなる絵に描いたおばはんスタイル。  
純一は紺のブレザー、チャコールグレーのスラックス。  
中に、白のポロシャツで決めている。

美和子は阪急デパートに気取りながら、入つて行く。

「デパートに行くのですか」

「そうや」

二人はエレベータで8階の食堂街に。

美和子は純一と腕を組んでスカイ大食堂に入った。  
(これが夢のデートに登場するレストランか。

お子様ランチでも食べさせるつもりか)

純一は大きな溜息をひとつ付いた。

二人は子供たちを横目で見ながら、椅子に腰を掛けた。

「何でも、好きなもんを食べてええで。

ただし、1000円以内でな」

「ええっ、1000円以内」

（金を持っている奴ほど、金には細かい。

大食堂で1000円以内とは。この女はかなりのけちだぞ）

純一は呆れながら、ハンバーグランチを頼んだ。

美和子も同じものを頼んだ。

「ああ、リッチに食べたわ。

こんなにリッチに食べたのは久し振りや。

寿命が延びたわ」

（どこがリッチなんだ。

これで寿命が延びるなら、俺なら800歳以上生きられるわ）

二人は食事が終わると腕を組んで、阪急三番街の高速バスター・ミナルに向かった。

「いつたい、どこに行くのですか」

「これからが夢のデートのメイン・イベント。

有馬クアセンターに行くんや」

「有馬のクアセンター」

「そや」

「僕は風呂に入る用意なんか、何もしてませんよ」  
「あなたのタオルや下着はうちがみんな用意してるから心配せんとき」

「えつ……下着まで」

「はいてびつくり玉手箱。うふふふ。楽しみにしてるわ」  
「まいっただなあ」  
「どや。昼間から温泉やで。リッヂやろ」

（日帰りの公衆温泉に入つて、どじがリッヂなんだ）  
それに、下着まで用意するなんて。  
何を考へてるのか、60女は怖すぎやる）

純一は関西弁丸出しのけち女には、ほとほと付き合てきれないと思つていた。

一人は高速バスを一時間位乗り、神戸電鉄 有馬温泉駅に付いた。  
そこからは、送迎バスで有馬クアセンターへ。

美和子は有馬クアセンターに入ると、誰かを捜しているのか、辺りをきょろきょろと見渡している。

「うーんや、うーんやで～」

美和子が大きな声を上げると気が付いたのか、60歳前後のおばちゃんの一団がこちらに向かつて走つて来た。

「待つてたんやで」

「思つとつたより、ええ男やなあ」

「あんたはオーバーに言つてると思つていたけど、電話より上玉や」

「私らにも、はよ紹介してえなあ」

おばちゃんの一団は、みんなで4人だった。

「慌てんとき！喫茶店に入つてから、ゆつくつ紹介したるわ」4人は美和子の温泉仲間だった。

有馬クアセンター内の喫茶店に、6人が入つた。

「はよはよ、紹介してえな」

テーブルに着くや否や、その内のひとりが口を開いた。

「よつしや、紹介したるわ。

その前にひとりずつ自己紹介をしてからや」

「じや、うちから言つわ。うちは森君子です。よつしや」

「私は、小田秋江です。お見知りおきに」

「私は川口清美です。お初にお目に掛かります」

「うちは千葉弘子です。よつしや」

4人が自己紹介すると、美和子がにやにやしながら純一を皆に紹介した。

「このは、芝純一言つて、うちのこれや」

そつ言いながら、美和子が左手の小指を一本立てて、自慢そうな顔をして、皆に見せた。

「よつしや」

いやいや、純一が挨拶をした。

「年は幾つでつか」

「まだ、ピチピチの30代やで。なあ」

「ああ」

美和子に続いて、純一が不機嫌な顔で頷いた。

「どこの知り合になつたん」

「それは、企業秘密や」

「こつからやの~」

「つい、最近や。なあ」

「・・・」

「私も『テイト』してくれへんかなあ」

「あかん。絶対あかん。手を出したら、『承知せえへん』で

4人が質問すると、答えは美和子がした。

「もう、深い関係になつてんのか」

「それは、想像に任せるわ」

「ええなあ」

「つちも欲しいなあ」

「年いつた男は臭うて汚いだけやけど、若い燕はたまらんなあ」

「ほんまや。そやけど、何で男は年取るとあんなに臭いんかなあ」

「腐つてゐのやろ」

「おならばつかりしてゐから、

おならの臭いが染み付いてゐのとちやつか」

「とにかく、臭いわ～」

「若い男は違うわ。」

男らしい臭いがたまらんけど、年いつた男は臭うてたまらんわ」

「ほんまや。ほんまや」

「つはつはつはつは・・・」

4人の女たちは言いたい事を言つて笑い転げてゐる。

純一は聞いてられないで、立ち上がつた。

「風呂に入るわ」

「そりか、そしたら、タオルと下着を渡したるわ」

美和子がタオルと下着を純一に渡そうとした。

「あつ、どんな下着やの。見せてえな」

「つちも見たいわ」

「よつしや、見せたるわ。ジャーン」

美和子がに眞に見せびらかすよつにブリーフの両端を引つ張つて見せた。

「わあ、超ビキニの紺色のブリーフやないの  
「ぞくぞくするほどセクシーやな」

「はいた所を見たいなあ」

「美和子はええなあ」

「羨ましいわ」

純一は黙つてそれらを驚掴みにすると、大浴場に足早に向かつた。途中、純一は「ミ箱にブリーフを投げ捨てた。

（棺桶に片足を突っ込んだおばんが何を血迷っているんだ。

少しは、年を考えろ）

クアセンターに来て以来、純一は頭に来ていた。

（彼ら仕事とはいえ、俺にも我慢の限界がある）

怒りを静めるために、純一はゆっくりと温泉に体を沈めた。先日、蹴られた傷は少し増しになり、青く沈んだ色も大分薄くなっている。

純一は金茶色の温泉に、さらに深く体を沈めた。温泉の水が湯船から溢れて流れている。

大阪での疲れが、純一は温泉の水と共にざあっと流れで行くよつこ思えた。

二人は阪急三番街の高速バスター・ミナルに着くと、近くの喫茶店に入った。

「今日は夢のデートに応じてくれてありがとうございます。すっごい楽しかったわ」

「ああ」

「お礼に約束通り300万円を明日用立てたるわ。それまでに借用書を書いといて」

「借用書？」

「当たり前やろ。借用書も無く、誰が金を貸すねん。」

そんなもん、いてへんわ

「・・・」

「もし、あんたがどろんしたらどうするねん。

警察にも訴えられへんわ

「警察」「

「そや。それと、利子として、年利5パーセントもうつわ。サラ金に比べてべらぼうに安くしてやるやう。

借用書に書かんとつて。別にお礼としてもうつわ

「わいりひせき」

「もう言ひ事だつたのか」

「そや」

「そしたら、行こか

「ど」「行くのですか」

「夢の、ティアのフィナーレにラブホテルに行へつまつやナビ

「僕はそんなもの行きませんよ

「年利5パーセントが不足か。しゃあないな。

そんなら、半分に負けとくわ

「じゃ、これで失礼する

「よつしや。清水の舞台から飛び降りて、1パーセントで、『せ

「いいかげんにじる。俺を舐めるな

純一は美和子の驚く顔を後にして、喫茶店を出た。

（前回といい、今回といい、全くの完敗だ。

2回も続けて失敗するなんて、ここ最近では珍しい。  
安易過ぎたのか。

獲物の選択を間違つたか。

情報不足か。

情報が取れない獲物もある。

喜んで金を差し出すためには、惚れさせるパワーが弱いのか。  
つまりは、俺の驕りか。

そろそろ、退け時かもしだい

失敗を反省しながら、純一はマンションに帰つた。

純一はパソコンのスイッチを入れ、`duck list`を開いた。  
東京、名古屋、福岡のリストは、証拠隠滅のために、すでに消して  
ある。

神戸が

成功例が 2 羽

失敗例が 1 羽（花岡麻由美）

大阪が	成功例	2 羽
失敗例	1 羽	
残り	2 羽	

これが現在パソコンに残つてている `duck list` だ。  
純一は成功例と失敗例をもう一度丹念に分析してみた。

（3回も続けて失敗する事は出来ない）

純一は襟の紐をギュッと閉め直した。

## 6話 恐竜

6話 恐竜

約束の日は晴れだった。

「わあ～い。わあ～い」

「良かつたわね、勇太」

「寝小便のおつちゃん、約束守つてくれた」

「これ！勇太。

寝小便のおつちゃんは絶対に言つたら駄目と言つたでしょ？」

「わかった。言わへん」

「じゃ、ママに指切りをして

「うん。する」

二人は指切りをした。

「本当にもう言わないでね

「言わへん」

かんなは朝、6時に起きた。

かんなが朝食を作つていると、勇太が目を擦りながら、起きてきたのだ。

余程、JIMMYに行くのを楽しみにしていたのだろう。

数日前に夜、淳也から電話が掛かって来たのを、かんなは思い出していた。

「次の休日はいつですか」

「日曜日です」

「じゃ、日曜日に大阪で待ち合わせしましょう。勇太君とJMRに行くのを約束しましたので」

「いいのですか」

「男の約束ですから」

かんなは電話の一部分を思い出すと可笑しくなった。  
(男の約束ですって。5歳の男の子をつかまえて)  
かんなはぷつと思い出し笑いをした。

淳也とは9時30分にJR大阪駅の中央改札口の前で、かんなは待ち合わせを約束していた。

「かんなさんの家族になれたらいいな」

かんなはこの言葉の真意を、もう一度この機会に、淳也に確認する覚悟でいた。

かんなと勇太は待ち合わせ時間の20分前に、JR大阪駅の中央改札口に着いた。

「おっちゃん、遅いな。まだかな」

「もう来るわよ」

「勇太、絶対にあれを言っちゃ駄目よ」  
「寝小便のおつちゃん?」

「そうよ。指切りしたからね」「絶対に、言わへん」「なら、いいわ」

5分ほどすると、淳也が現れた。

「あつ、おつちゃんや」

勇太が淳也に手を振った。

「早かつたですね」

「この子が急がすもので」

「そうでしたか」

「おつちゃん、はよ行こ。はよはよ」

勇太が淳也の手を引っ張った。

「わかつた。わかつた」

3人は環状線で西九条まで行き、JRゆめ咲線でユニバーサルシティ駅へ。

ゲートの前で、

「やつたあ

勇太ははしゃいで、飛び回っている。

チケットを求めるが、3人は早速UIMJ内へ。

そこは、まるでアメリカだった。

「わあ〜い。わあ〜い。わあ〜い」

ぬいぐるみのウッドパッカーとシュロックとエラモが3人を熱烈歓迎。

シュロックがふざけて勇太に後ろから抱き付いた。

「ヒュウワ～」

勇太が、嬉しい、楽しい、怖いをミックスジュースにしたような悲鳴を上げた。

淳也は悲鳴を上げている勇太をデジタルカメラでパチリ。

「まあ、淳也さんたら。もうパパみたい」

かんなが嬉しそうに小さな声で呟いた。

日曜日のせいか、U.M.J.内は、どこも人で混雑していた。

何度かU.M.J.に来た事のある淳也は、地図を片手に勇太が喜びそうなハリウッド・ジェットコースター、スパイダーメン一人を案内した。

どちらも超満員。

「ジェットコースターに乗りたい。ジェットコースターに乗りたい」  
駄々をこねる勇太をなだめて、淳也は次にジェラシックワールドへ。  
そこも満員ではあつたが、前よりはずつと増しだった。

「よし、ここで待と～」

「面白そうね」

「やつたあ」

勇太もかんなも嬉しくてはしゃいでいる。

30分ほど並んで、3人はいよいよ館内へ。

3人は並んでボートの先頭に乗った。

「恐竜が出て来るから、勇太くん、気を付けろよ」

「ママ、恐竜が襲つてくるん」

「さうよ。怖いわよ」

「あつ、出た!」

淳也がふざけて叫んだ。

「ぎゃあああああ~」

勇太がボートが動く前から悲鳴を上げた。  
ボートが動き出した。

熱帯雨林を探検するボート。

大地をのっしのっしと歩く恐竜。

水の中から恐ろしい顔を現す恐竜。

いろんな恐竜が登場するたびに勇太は、

「出た!」

「わお~」

と、驚き、喜んで、歓声を上げている。

恐怖と興奮が続く、手に汗握る冒険。

ボートはクライマックスへと進んで行く。

突然、体長8メートルの最大の恐竜が3人を襲う。

「わあ~」

その瞬間、暗闇の中を26メートルの高さからまつさかさまに川底へ。

「あああああああ～」

「ギャツギャア――――――――――――――――――――――

かんなは勇太に負けないすごい叫び声を上げた。

水しぶきの中をボートは川に下つて行った。

「すごい迫力ね」

「すごい、すごい、すつごい！ママ、また乗せて」

勇太は髪をベチャベチャにしながら、興奮している。

「僕はかんなさんの悲鳴がすごかつたです」

「まあ、ご免なさい。だつて、まっさかさまに落ちるんですもの」

「一人とも楽しめて良かったです」

「まあ、淳也さんたら」

3人は先ほどの驚きと興奮を語り合いながら、並んで歩き出した。

少し歩いてから、ベンチを見つけると、そこに3人は腰を掛けた。

「そろそろ昼にしましょうか」

かんなと淳也は、近くの売店へ。

仲良く3人はピザを頬張った。

「どう」

「なかなかいけますよ、これつ」

「ママ、すつしむおいしかった」

「本当、おこしいわね」

「かんなさん、僕はこれからハリウッド・ジョンストンースターをひとりで待ちます」

「えつ、ひとりで待つの」

「ええ、勇太君がジョンストンースターに乗りたがっていましたから「そんなの悪すぎるわ」

「1時間以上待たなければならぬな」と思います。

その間、かんなさんたちは好きなアトラクションを見ていて下さい」

「いいのかしら」

「そうぞじて下さい」

「じゃ、甘えようかしら。勇太、ジョンストンースターに乗れるわよ」

「わ~い。やつた~」

「淳也さん、ありがとうございます」

「いいえ」

「ママ、アイスクリームが食べたい」

かんなは勇太に1000円札を渡した。

「私たちはここに座っているから、アイスクリームを買つたら、すぐには帰つて来るのよ」

「は~い」

かんなは

「かんなさんの家族になれたらいいな」

と他の言葉の真意を確認するのは、今しかないと思った。

「淳也ちゃんひとつ聞いてもこー」

「じいちゃん」

「先日、淳也ちゃんは、

かんなさんの家族になれたらこーにな

と、言つたわね」

「ええ、言いましたけど」

「あれは、じいこーの意味なの」

「じいこーの意味って」

「願望なの？それとも現実なの？」

淳也はかんなの顔を覗き込んだ。

「もうひとこー現実です」

「願望じや、なーいのね」

「ええ、現実です」

「じいの事は、あれをプロポーズと受け取つてもこーの？」

「わー、受け取つて下さー」

「本当に、受け取つていいの？」

「本当に、本当にです。わからこーなーなら、さつあつと聞こーます」

「・・・」

「かんなさん、僕と結婚して下せー。  
勇太君のパパにならせて下せー」

「淳也さん・・・うひひひ・・・」

かんなは涙を流した。嬉しくて嬉しくて涙が止まらなかつた。

「本当に、こんな子持ちでいいの」

「子持ちでいいです」

「淳也さん、初婚なんでしょう。後で、後悔しない?」

「後悔なんか、絶対にしません」

「淳也さん。うひひひひひひひ」

かんなは人目も気にせず、わあわあ泣きながら淳也の胸に飛び込んだ。

「うひん、うんうん、うひひひ」

かんなは淳也の胸で、涙をポロポロ流して泣いている。

淳也はかんなを思い切り抱き締めた。

「どうして私なの?」

「お袋が糞尿だらけの時、かんなさんの介護の仕方を見て、  
結婚するならこの人だなと、直感しました」

「それなら、吉見さんにお礼を言わなくちゃ。  
そして、もつと、便を垂れ流してと頼もうがじー」

「それだけは、勘弁して下せー」

「まあ、淳也さんたら」

「じゃ、かんなさんはどうして僕を」

「前の亭主は暴力で泣かされたわ。  
だから、男の人は怖くって。  
もひ、結婚なんかするものかと思つていての」

「それが、なぜ？」

「吉見さんの介護を手伝つ淳也さんを見て、男の人にもこんな優しい人がいるんだって。

この人ならやつていけるかなと思つたの」

「ウンチが取り持つ縁か」

「ウンー。」

「えつ、かんなさんつてそんなだじややれを言つんですか」

「ウンー、吉見さん、びっくりするわよ」

「お袋、ウンと喜びますよ」

「まあ、淳也さんたら」

「ところで、勇太君は遅いですね」

「いけない。私話に夢中になつていて、勇太の事を忘れていたわ。  
本当、勇太遅いわね」

「迷子でもなつたのかな」

「えつ、迷子。どうしよう。捜さなくちゃ」

「僕も捜します」

二人は勇太を必死になつて捜し出した。

「トイレにもいませんね」

ショッピングモールの中にも入つて調べたが、勇太はいなかつた。

「勇太～。勇太～。勇太～」

「勇太くん。勇太くん。勇太くん」

二人は1時間位捜したが、勇太は見つからなかつた。

「広すぎて捜せないな」

その時、UJMの制服を着たクルー（スタッフ）が歩いているのが見えた。

淳也は走つて行つて、クルーを引き止めた。

かんながクルーに尋ねた。

「迷子なんですが」

クルーは手帳を持って、かんなに質問した。

「お子さんのお名前は？」

「綾瀬勇太です」

「年齢は？」

「5歳です」

「身長と体重は？」

「110センチ、20キロ位です」

「勇太君の髪型は」

「普通のぼっちゃん刈りです。前髪は揃えていませんが  
「わかりました」

「ほかに何か、特徴はありますか  
「別に無いです」

「今日の服装は?」

「ブルーのジーンズに黄色のポロシャツです」

「自分の名前は言えますか

「はい、言えます」

「お母さんの名前と携帯の電話番号を教えてもらいますか?」

「綾瀬かんな。

携帯は 090 ・・・・・・・です」

「少し待つて下さいね。

「いま、迷子センターに問い合わせしています

「・・・」

「申し訳ありません。

「いま、迷子センターには、勇太君らしい子供は保護されていないよう

「です」

「今から専門のクルーに連絡して、勇太君を捜すように手配します  
「迷子センターで待たれます。それとも、携帯に連絡します」

かんなは淳也の顔を見てから

「携帯にお願いします」

と、言った。

「では、迷子センターの電話番号を教えておきます」

「06 · · · · · です」

「それからお母さんの写真を撮らせてもらいますか。  
確認の為に勇太君に見てもらいますので」

「わかりました」

「もし、お母さんが勇太君を見つけられた場合は、迷子センターに  
電話を入れてもらえますか」

「はい、そうします」

「では、お母さんの写真を撮らせて頂きます」  
クルーは携帯電話でかんなの写真を撮影した。

「これで、失礼します」

「よろしくお願ひします」

クルーは頭を下げて立ち去った。

「淳也さん、これからどうする?」

「今まで1時間位捜してもいなかつたですよね。」

今度は食事をした所から、ジエラシックワールドの方へ、  
戻つてみたらと思つのですが」

「そう言えば、ずっと進行して來たよね。 そうしましょうか

「じゃ、そうしてみましょう」

一人は食事をした所まで早足で戻つた。

その間も、かんなは左右をきょりきょりと眺め回して、勇太を捜していた。

(もしかすると、ジョラシックワールドの辺りにいるかしれない)

淳也はそんな勘がしてならなかつた。

淳也の勘は当たつていた。

勇太はジョラシックワールドの辺りで、ベソをかけて泣いていた。

「あっ、勇太君！ やっぱり俺の勘は当たつていたな

「あっ、本当、勇太だわ。勇太～。勇太～」

「あ、ママだ。うわあうわあうわあうわ～」

勇太はかんなど淳也を見つけると、安心したのか、今まで以上にわあわあと泣き出した。

「勇太、見つかって良かつたね。ママ、心配したんだから。ウツウウウウツ～・・・」

かんなは勇太を抱き締めて、涙を次から次に流している。

「勇太君、良かつたな」

淳也は勇太の頭を撫でた。

「うん。ひいっく、うっく、うっく、うっく・・・」

「良かつた。良かつた」

「勇太、淳也さんがいたから見つける事が出来たのよ。

お礼を言ひなせ!」

「おっちゃん、ハハハ、ありがとう、  
うへへ、うへへ、うへへ・・・」

「よ～し。勇太君、男なら泣くのはやめな。  
その代わり、おじさんが肩車をしてやる!」

「ほんと。もう、泣けへん。わあ～い」

「勇太、良かつたわね」

「僕、おっちゃん、大好きや」

「勇太君、おじさんがしゃがむから」の上に乗るんだよ」

「やつたあ～」

「よ～し。立ち上がるぞ」

「わあ～」

「怖くないか」

「すげえ～。すげえ、高いなあ。おっちゃん、僕、怖ないで」

「勇太、大丈夫?」

「大丈夫や」

「かんなさん、迷子センターに電話をして下せ!」

「そうやう、電話しなくつちや」

かんなは迷子センターに携帯で電話をしている。

「わあ～い。わあ～い」

勇太は肩車に乗つて、はしゃいでいる。

「僕、おっちゃんが大好きや」

「そうか。おじさんも勇太君が大好きだ」

「おっちゃん、頼みがあるねん」

「何がして欲しいのだ」

「おっちゃん、僕のお父ちゃんになつてくれへん

勇太はこれまで、お母さんをママ、お父さんをお父ちゃんと呼んでいた。

「よし、おじさんが勇太君のお父ちゃんになつてやる」

「ほんまやで〜」

「本當だ。男の約束だ」

「やつた〜。わあ〜い。わあ〜い。わあ〜い」

「勇太。どうしたの。何か、いい事でもあつたの」

電話を終えたかんが、勇太に尋ねた。

「おっちゃんと男の約束をしてん」

「何を約束したの」

「あんな〜。おっちゃんが僕のお父ちゃんになつてくれるねん

「まあ、勇太のお父ちゃんに」

「男の約束してん。ママ、嬉しいや〜。

おっちゃん、ハンサムやもんな

「まあ、勇太つたら。そつよ。

おじさんが勇太のパパになつてくれるのよ

「パパやないで、お父ちゃんやで。嬉しいな。嬉しいな」

「勇太、良かつたね。お父ちゃんが出来て」  
3人はそれぞれの心の中で、ひと足早く家族になろうとしていた。

淳也は考えていた。

^

(かんなさんの家族になる前に、今の仕事を清算しなければ)

先日、2つの仕事を続けて失敗した時にも、脳裏の片隅でそろそろ  
引け際かなと、淳也は思っていた。

かんなさんとこうなった以上、今の仕事を続ける事は出来ない。  
勇太君のためにも、お袋のためにも、今の仕事から離れる必要があ  
るだらう。

(次の仕事で最後にしよう。

最後の仕事をバツチリ決め、花道を飾つて、おわらばしよう)

淳也は決心が付いた。

並んで歩くかんなを淳也は見た。

かんなは幸せそうな優しい優しい顔をしていた。

## 7話 目撃

パソコンの前に座りながら純一は、UMLでの楽しいひと時を思い出していた。

（勇太君は迷子になつたが、見つかって本当に良かった。  
ジェットコースターに勇太君を乗せてやれなかつたのが、少し心残りだ。

かんなさんは僕がプロポーズをすると、泣きじゃくっていたな。  
あの涙の為にも、これで仕事は最後にしよう）

純一はそう決意すると、duck listに目をやつた。  
Duck listには、現在、2羽の獲物が残つていた、

1羽は松原恵

年齢	52歳
身長	158センチ位
体重	52キロ位
職業	ホステス（南のキャバレー 花の国）
携帯電話	090-XXXX-XXXX

もう1羽は矢本薰

162センチ位

年齢31歳

体重 50キロ位

職業 クラブホステス（北新地クラブ LIP）  
ナンバー 2ホステス

携帯電話 090 · · · · ·

純一は2羽の獲物を比べてみた。  
どちらも情報は不足している。

が、純一がいろんなホステスに聞き取りで調べ、身に着けている装飾品を見た限りでは、どちらも相当の金を持っている事は確かだろう。

罠にはめ易いのは、あきらかに52歳の松原恵である。

しかし、最後の仕事と言つ事を考えれば、矢本薫に食指が動いた。

純一のプロ意識を満足させる最後の獲物は、罠にかけにくい獲物こそふさわしかった。

純一は薫に、最後の獲物としての狙いを定めた。

『LIP』は船大工通りの全空ホテルのすぐ近くにあるクラブ。  
そこは、ボックス席が40席位あり、クラブホステスが12人ほどいた。

そのクラブホステスのひとり薫と純一は、同伴で全空ホテルの5階にある日本料理『雲上』で夕食をしていた。

先付けに続いて造りが出て来た。

その時、純一は和服で決めている薫に、脱いだ後を考えて  
「着付けは自分で出来るのですか」

と、聞こえと思っていた。

その前に、薰が口を開いた。

「私はちやんに頼みがあるんやけど、聞いてもらひやるかな  
「えつ、頼みつて、何ですか」

「つちのお客さんでは、#Nちゃんしか出来ない内緒の頼み。  
引き受けで欲しんやけど」

「僕にしか出来ない内緒の頼みつて、いつたい何ですか」

「私のライバルをメロメロに  
「ライバルをメロメロに」

「やつ。仕事が出来ない位にしてもうれば、それで結構よ。  
#Nちゃんなら簡単でしょ」

「ライバルつて、ナンバー一のリサさんですか」

「よくわかつたわね」

「それは、簡単じゃないですよ」

「どうして、ほかのお客さんならそうかもしれないわ。  
でも、#Nちゃんなら、たやすいと思つけど」

「リサさんはまだ若こし、お客さんからもてもじやないです。  
とても、無理ですよ」

「私も」の世界でただ飯を食つてゐる訳じやないのよ。

男を見る皿は持つてこぬつもつよ。#Nちゃんはただの男じやないわ

「ただの男じやない?」

「そうよ。

「あなたは女を惹きつける口口モングたつぱりと  
出でるじゃないの」

「やつですかね」

「やつよ。

「あなたなら金がすべての女は別にして、大概の女はイチ口口よ」

「それは、かいがぶりですよ」

「あなたやんなら出来るわよ。

その代わりお礼はたつぱりとさせてもらはりますだけ」

「お礼?」

「ええ、ここに200万円があるわ。これは前金よ」

薰はテーブルの上に帶封のある100万円札をポンと2つ置いた。

「つまく行けば、成功報酬としてあと300万円をあげるつもりよ。  
悪い話じゃないでしょ?」

「悪い話ではないが……」

(全く、思つても見ない方向に物事が動く。

最近、自分のシナリオ通りに物事が運ばない。どうする?  
流れに自然に身を任せせるか。

それとも、この話には乗らざ、これで仕事を最後とするか)

「どうするの?」

「……と、やうしてもうつよ。

要は、薰さんがナンバー1に復帰できれば言訳だらう

「やつよ。リサを潰すためには、一番の薬は男なの。

リサをメロメロにさせて仕事が手に付かないようさせられる事が出来

る飛び切りのっこ男、じゃなことね

「そんな自信は無いけれど、やらせてもいいわよ。

その代わり、方法は俺に任せてもいいからな」

「ええい、わよ。#あけやんに任せせるわ」

話がまとまると、純一は前金の200万円を上着の内ポケットにしまった。

薫は話がうまく運ぶと、ハサ、紙鍋、ちらし寿司、シャーベットをペロリとした。さらばた。

「いい事教えて上げよつか」

「何ですか」

「#あけやんが私を指すのじゃないな」

「#あけやんを見るリサの目は凄いのよ」

「リサさんはどんな目をしていましたか」

「あれは嫉妬に狂った目よ」

「信じられないな」

「リサは#あけやんに気があるかもよ。」

「ねえ、意外と簡単な仕事でしょ」

「薫さんはまいったなあ。

うまい事言つて、

あとで僕を笑い者にしようと黙つてこらんでしちゃ

「やうかもね」

二人は顔を見合させて笑つた。

純一はシナリオの変更に頭を抱えていた。

青山リサ。25歳。

クラブ『RIP』では、5年間位、薫が店のナンバー1だった。最近、この座をリサが奪い、薫はナンバー2の座に追われ、女のプライドをズタズタにされていた。

25歳で店のトップに立つたリサは、今や飛ぶ鳥を落とす勢いがあった。

落ち田な女ほど落としやすいが、上がり田の女は攻めにいく。

純一は難攻不落の城を落とす軍師のように、相手の弱い部分を捜していた。

「嫉妬」

純一は薫の話を聞いていて、この言葉をキーワードにして、シナリオを組み立てようと思つていた。

同伴で薫と一緒に『RIP』に行くと、純一はマネージャにチップを渡した。

そして、来週の月曜から3日間連続で、リサの同伴の予約を依頼した。

マネージャーはリサの都合を聞き、月曜、火曜の2日間の予約を取る事が出来た。

クラブの常連さんが同伴には使わないコース。

普通の若いカップルのデートコース。

2つの観点から、月曜日、純一は西梅田で待ち合わせをし、近くにある桜橋ボーリングで同伴、いやデートをした。

リサには電話で普段着を用意する事を、純一はあらかじめ連絡しておいた。

「同伴でボーリングするなんて、初めてよ」

リサは呆れていたが、ボーリングをするほどにはしゃぎ、終わり際には普通の女の子に戻っていた。

ぎりぎりまでボーリングをしていたので、マクドナルドでハンバーグを頬張ると、二人は急いで『RIP』に駆け込んだ。

「恋人とデートしたみたい。今日は超楽しかったわ。ありがとう」  
リサは熱い目で純一に礼を言った。

火曜日は昨日より1時間早い3時に、新阪央ホテルのロビーで二人は待ち合わせをした。

目が覚めるような真っ赤なドレスをきたリサが現れた。

グレンチェックのスーツでパリッときめる純一が、リサを見て手をさつと上に上げた。

「昨日はありが・・・」

リサがお礼を全部言い終える前に、

「好きだよ」

と言つて、純一がリサの口をふさいだ。

群集が行き交うホテルのロビーでの突然のキスシーン。映画の撮影現場かと錯覚する余りにも美しいキスシーン。

群集は息の呑んで見詰めていた。

その中に、かんなの前の夫の前崎がいた。

前崎は携帯電話を取り出すと、純一の顔がわかるような角度で素早く撮影をした。

「シャララーン」

「シャララーン」

「シャララーン」

さうして、角度を変えて前崎が撮影をする。

「シャララーン」

「シャララーン」

純一は長い口付けが終わると、リサの耳元に向かって囁いた。

「苦しいほど、愛している」

「私もよ」

リサも純一の耳を見詰めながら呟いた。

「2人きりにならう」

「ええ」

純一はフロントで部屋を手配した。

前崎はフロントに並ぶ一人を携帯でわからないように撮影している。

「シャララーン」

「はやく振り向け」

「よしー。」

「シャララーン」

2人はエレベータに乗り込んだ。  
前崎はどうしようかと迷つたが、エレベーターがどの階で止まるか  
を見定める事にした。

エレベータは5階、7階、8階で止まった。

前崎は次のエレベーターで5階、7階、8階で降り、辺りの部屋を

見渡したが、2人がどの部屋に入ったかわからなかつた。

ふたりは803号室にいた。

純一はリサをとろけさせていた。

リサは同伴以来、純一を特別な目で見ていた。  
今まで同伴と言えば、おじん、じぶ、禿げばかり。

(うせえへんだよ)

いつもリサは心の中でそう思っていた。

いぐら、一流のレストランで最高級のおいしい物を食べても、お金の為でも、相手がこれではと、うそびりとしていた。

そこへ、気になっていた純一と夢のよつな同伴。

ボーリングが、マクドナルドのハンバーグが、取立ての野菜のよう

に、みずみずしく新鮮だった。

リサは純一と男と女の関係になつた時、『RIP』でのナンバー1の地位やお金はどうでも良くて、純一との結婚を夢見るようになつっていた。

リサはナンバー1クラブホステスでは無く、普通の幸せを求める普通の女の子になつていた。

(純一は自分の愛を、きっと感激して受け止めてくれるだらう)  
リサはそう確信していた。

しかし、純一の反応は全く違っていた。

あくる日から、純一は事もあらうに、薫と同伴を始め出した。リサは信じられなかつた。

気が狂いそうになるほど、リサは薫に嫉妬をした。

（あんなポンコツ女のどこがいいのよ。おばんじやんか）

リサは純一を激しく恨んだ。

次の日も純一は薫と同伴で『RIP』に現れた。

一人を見たとき、リサはブランデーグラスを床に叩き付けた。

「畜生！」

「パリ～～ン」

リサのプライドがワイングラスのよつに粉々に砕けた。

次の日、リサは『LIP』の前で、薫を待つていた。

その日、薫はひとりだった。

リサが鬼のような顔で、薫に声を掛けた。

「人の男に手え出せんとつて」

「人の男つて誰の事や」

「えちやんに決まつてるやる」

「えちやんがあんたの男やで。ふん、笑わせないでよ」

「何を」

「#あらやんはもとむとひの密や。盗んだのはあんたや」

「「ひぬせえんだよ。おばんが何ほやいとんだよ。」

今は俺の男だから手を出すなと言つてんだろ。てめえは、引っ込んでや」

「ふぞけるな。あんたの男だつて。何を血迷つた事を抜かしやがる。#あらやんはうちの男や。あんたこい、手を引きよし」

「「ひぬせえ、やけんな」

バチン。

リサが薫の頬を思い切り平手でぶつた。

「やりやがつたな」

バツチーン。

今度は薫がリサの頬つぺたを思い切り叩き返した。

「何を」

リサが薫の和服の襟ぐりをぐつと掴んだ。

「何をらすんや」

薫がリサのドレスを驚掴みにした。

一人は『RIP』からすぐ近くの船大工通りの真ん中で、派手に取

つ組み合ひを始めた。

野次馬がみるみる一人を囮んだ。

「ええぞ！」

「もつと、やれ

「ピコ～～」

野次馬が野次と歓声を上げる。

「やりやがつたな」

「くたばりやがれ

リサが薫の馬乗りになり、薫の首を締め上げる。

「苦しへい

「殺したる

「ううつ～

その時、チーフの藤村がリサの手を振りほどいた。

「あほんだら。やめんかい

藤村はリサの両脇を抱えて力付くで立ち上がらせた。

リサはハアハアと荒い息遣いをしている。

薫は死んだように目を瞑つて寝たままである。

「薫さん、薫さん」

藤村が薫の体を揺すつた。

「薫ちゃん」

薫がぱちんと目を開けた。

「大丈夫や。ああ、苦しかつた。死ぬかと思つたわ。あのあま～ほんとにうちを殺す氣やつたわ。危ないといいや」

リサは物凄い形相で仁王立ちをしている。

「今度、手を出してみい、今度はほんとに殺してやる」

「殺せるもんやつたら、殺してみい」

「二人ともやめんかい。しゃあない奴っちゃん」

「人は猛獸のような目をして睨み合つてゐる。

「やめんかい、言つたらやめんかい」

「あいつが悪いのや  
「てめえだろ」

藤村は何とか2人をおとなしくさせると、野次馬を解散させた。

二人はぶつぶつ言いながら、クラブの中に入った。

藤村は一人をテーブルに座らせ、こつぴぢく叱り付けた。

あれ以来、リサは同伴を断るよつになつた。

『RIP』のノルマは、同伴が週に3回。

幾らマネージャが説得しても  
「暫くは、同伴はしないんや」と、リサはこでも断り続けた。

そんなある日、薰が結婚すると噂が流れた。  
結婚の噂を流したのは、薰自身だった。

純一は薰と2日続けて同伴をして以来、『RIP』には顔を見せなかつた。

リサのその後の状況については、薰から電話で聞いていた。

その時、薰に

「結婚すると噂を流してくれ」と、純一が指示を下えていたのだ。

リサは、薰が結婚すると噂を店の子を通じて耳にした時、怒りと嫉妬で体中がぶるぶると震えた。

(薰のあほんだら、今度こそ殺してやる)

(えちやんに逢つて真意を確かめたいなぜ、逢いに来てくれないの。なぜ?なぜ?なぜ?)

リサは純一に逢いたくて逢いたくてたまらなかつた。  
が、純一は『RIP』には姿を見せなかつた。  
純一の連絡方法もわからなかつた。

リサは苦しくて苦しくて悶えていた。

苦しみを逃れるために、リサはアルコールに助けを求めた。

リサは酒を無茶飲みしては、酔つてふらふらになり、密に悪態を付いた。

「ひるせえんだよ」

「ケツを触るな。このくそつたれ」

「ぞけんな。きもいんだよ。禿げじじい」

余りの悪態と同伴の拒絶で、リサの売り上げは大幅にダウンした。ナンバー1の座から、リサは飲んだくれ、荒れに荒れ、お荷物に成り下がつた。

「俺のどこが悪いんだよ。てめえ、ふざけるんじゃねえよ」  
リサはチーフの藤村の注意にも従わなくなつた。

元の状態への復帰を願い、我慢に我慢を重ねていた『RIP』のスマは、ついにリサを首にした。

「辞めてやるひじじゃないか」

捨て台詞を残してリサは、『RIP』を辞めて行つた。

純一は同伴の入つてない日に、薰と喫茶店で待ち合わせをした。

「お疲れさん、さしあやん。さすがやねえ」

「無事、ナンバー1には復帰出来ましたか」

「#えひやんのお陰で、無事、栄光の座に返り咲く事が出来たわ。

「ありがとう」

「それは、良かつたです」

「あつ、忘れん内に約束の300万円渡しとくわ」  
薰は300万円が入つた茶封筒をテーブルに置いた。

純一は封筒の中に手を移した。中には、100万円の束が3つ入つている。

「確かに」

その時、ウエイトレスがコーヒーを2つテーブルの上に置いた。  
コーヒーの香ばしい香りがブーンと漂つた。

コーヒーを飲みながら、薰が口を開いた。

「私が睨んだ通りやつたなあ。いや、それ以上かもわからへん  
「いや~、それほどでも」

「えひやんは劇薬になるやうとは思つていたけど、  
想像以上の効き方や。びっくりしたわ」

「何がです」

「リサをメロメロにしてとは頼んだけど、  
息の根を止めるとは思つてもみんかったわ  
「息の根を止める?」

「リサはアル中になり、お払い箱や。  
そやけど、たいしたもんやなあ~」  
「辞めたんですか」

「あつ、#あひやん」言つてなかつたかな。

リサは首やで。ええ氣味やわあ

「つさわん」、少し悪かつたかな

「ええんよ。リサは嫉妬で私を殺そつとしたんよ。

あんな性悪女、辞めてせいせいでいたわ

「僕は後味が少し悪いな」

「#あひやん、凄い効き田やつたけど、どんな手を使ったの」

「それは、企業秘密だ」

「#あひやんは劇薬でも、青酸カリやな」

「#あひやんも、

ライバルをひと噛みで殺すまむしやないですか

「青酸カリとまむしか。

毒は毒を持つて制すと言つから、

#あひやん、私と結婚するつてこのままひへ。」

「それは、遠慮をしてもうこまゆ」

「結婚して欲しいこと言つ男は幾らでもこるの」、

気に入った男は遠慮するか。

世の中はままにはならんなど

「栄光の座に返り咲いたのですから、

もうひと花咲かすと言つのはどうですか

「それももうやな」

一人はにこやかに談笑し、そして別れた。

（終わった！

花道を飾るとまでは行かないが、すれすれ合格点で無事最後の仕事を終える事が出来た。

これで、きつぱりとこの仕事から足を洗おう。  
警察のやつかいにならなくて、本当に良かつた。

これからは、何か堅気の仕事を探そう

純一はそれなりの充実感を噛み締めながら、マンションへと足を急がせていた。

途中、純一は100円硬貨を上に放り上げ、それを右手で左手の上乗せた。

コインは裏を指していた。



かんなの前の夫の前崎は携帯電話の液晶画面を見ながら、にんまりと微笑んでいた。

「しかし、よう、撮れてるなあ」

次の画面を見ては、

「あの意氣地なしめ、吠え面をかかせたるから、それまで待つけど、前崎はひとりでにたにたと笑っていた。

「二人が部屋に入る決定的瞬間を撮れんかったのは、ほんま残念やつたなあ」

「でも、これだけ証拠写真があれば大丈夫や」

「そやけど、相手の女はええ女やな」

「これでまたかんなを俺の女にできる。よっしゃあ

「かんな、次のお前の休みには行くから、楽しみにしちゃ

「ああ、ぞくぞくするやんけ」

前崎は独り言をぶつぶつ言つてしま、ひとりでけたけたと笑っていた。

純一はパソコンの前に座り、duck listを開いていた。

「これまで随分と世話になつたが、これでおさらばだ」  
そう呟くと、純一はduck listをすべて消滅した。

（警察沙汰にならずに、足を洗える事が出来るのは、  
本当にラッキーだった）

純一は今までの数々の仕事を振り返っていた。

「俺もこれまで随分と危ない橋を渡つて来たもんだ」  
「しかし、不思議と警察には縁が無かつた。」  
「これも欲を出さなかつたお陰かな」

「女たちは達者で暮りじてゐるだらうか」

「リサはアル中で『RIP』を首になつたらしく。  
少しやり過ぎたかな。悪かつたな、勘弁しろよ」

「勝手かもわからないが、みんな幸せに暮らして欲しい」

純一は心の中で女たちに頭を下げた。

ジョッキの中には100円硬貨が半分位入つてゐる。

（もう使う事もないだらう。）

勇太君にでも小遣いにプレゼントしようか

純一はマンションをこつでも引き取れるよつて、できればあと後片付けをした。

「よし、これでいいか

「堅気の仕事を探そうと思つ。

苦労を掛けると思うつが、きっと幸せにしてみせぬ」

かんなの顔を思い描き、純一が力強く呟いた。

実家への帰り支度を済ませると、純一は阪急梅田駅に向かった。

「ママ、遊びに行つてもええ」

勇太がかんなに元気良く声を掛けた。

「すぐに帰つて来るのよ」

かんなが勇太を田で追いながら答えた。

「はい」

ギイードン。

勇太がドアを閉めて出て行つた。

勇太が出て行くと、シンと部屋の中が静まり返つた。

今日は久しぶりの休日。

かんなは朝から、朝食の後片付け、掃除、洗濯と大忙しだった。

洗濯物をベランダに干し終わつてほつとしていると、チャイムが鳴つた。

ピンポーン、ピンポーン。

誰かなど、かんなが玄関の扉を開けると、前の夫の前崎が玄関ににやにやした顔をして立つていた。

「久し振りやな」

「何の用。用が無いのやつたら帰つて」

「ええ話や」

前崎はにたつにたつと嫌な笑いを続けている。

「何やの。にたにたと笑つて、気持ちが悪いわ。

用があるのやつたらやつと話つて」

「びつくつするで」

「何やがの」

「腰抜かしたらあかんで～」

「早く言いな。言わんつもりなら、帰つて」

「わかった。わかった。見せたるわ。

」こではなんやから、中に入れてくれや

「いやや。そこで見せたらええやないの」

「しゃあないな。ほんなら一枚だけ見せたるわ

前崎はスマートフォンのポケットから携帯電話を取り出すると、液晶の画面に一つの映像を映し出した。

それは、淳也とリサがホテルのロビーでキスしている写真だった。

「」の写真はプリントしてあるからお前にやるわ

前崎は上着の内ポケットから写真を取り出し、かんなに手渡した。

かんなはその写真を見て、あつと驚いた。

「嘘や。信じられへん。淳也さんによう似ていてるけど、別の人や

「あほか。よう見てみいや。正真正銘にあの男やんか。  
お前、目が悪いんか」

「私は、絶対に信じへん」

「そない言つたかて、俺が新阪央ホテルで、ぎょっと驚いたから、思わず写真に撮影したんやないか」

「嘘や。合成かもわからへんし」

「別の写真を見たら、嘘か、本当か、合成か、違うか、すぐわかるわ」

「そしたら、見せてみいな」

「見たいのやつたら、中に入れたらやな」

「そんならええわ。うち、信じてるから」

「そつか。そんなら、さこなら」

前崎は帰る振りをして歩きかけた。

「待つて！すぐに帰ると約束してくれるか

「ああ、なんぼでも約束したるわ」

かんなは渋々前崎を中に入れた。

「邪魔するで〜」

前崎が含み笑いをしながら、中に入った。

「あんた、そこでええやろ」

かんなが玄関先で話をと思つていたのに、前崎はズカズカとリビングまで入つて行つた。

(まあ、仕方ないか)

かんなはリビングに入る前崎の後姿を見ながら溜息を付いた。

「すぐに帰つてや。あつ、そこそこ座つて」

「わかつてると書つたやろ」

前崎は食卓テーブルに腰を下ろした。

かんなは向かい側に腰を掛けた。

「写真を見るだけやで。見たら帰つてや  
「わかつてるやんけ」

「そんなら、見せて」

「よし、見せたるわ」

前崎はロビーで撮つた他の写真をかんなに見せた。

「淳也さんみたいやし、そつやないみたいや。ようわからんわ」

「相手の女は凄い美人やで。お前より年もずっと若いしな」

「そつみたいやな」

かんなは食い入るようにして液晶の画面を見てくる。

「次の写真を見たら、あの男の顔も、  
超美人の女の顔もはつきりわかるわ」

前崎はホテルのフロントから、こちらに振り返つた一人の写真をかんなににたにた笑いながら見せた。

かんなはその写真に目が釘付けになった。

「間違いないわ。淳也さんだわ。信じられない！」

「どや、間違いないやろ。隣の女を見てみろや。」

男が振るい付きたくなるようなええ女や。  
しかも、若おで、ふりふりや。俺かて羨ましいわ

かんなは呆然としていた。

思考力も無くしていた。

前崎はかんなの表情を見て、ぬつと立ち上がった。  
かんなの肩に腕を回すと、いきなり口付けをした。

「何をするの。やめて！」

「あいつかて、ええ女とええ事やつとるやないか。  
俺らも負けんようにやろつやないか」

「やめて～言つたら、やめて」

前崎はかんなを力付くで床に押し倒した。

「やめんと人に言つで」

「なんぼでも言つたらええ。ええとこ見せたるわ

「警察を呼ぶから」

「呼んでみい。觀衆が多いほど興奮するわ

「誰か来て～」

「来るかあ。俺らは夫婦やで。夫婦が何して何が悪いのや  
「夫婦やない。頼むからやめて」

前崎は足をバタバタさせているかんなのスカートに手を入れ、下着

を膝まで落とした。

「また、夫婦になろ」

「いややあ～」

そこへ、勇太が帰つて來た。

「ただいま」ママ、帰つたよ。あつ、お父ちゃん、何してんの」

「勇太。助けて～」

勇太はかんなの声を聞いて、咄嗟に手に持つてゐる野球のバットで前崎の尻を思い切り叩いた。

バス～ン。

「いたつ、何すんねん」

バス～ン。

「あほ！ やめんかい」

「どけ、どかんと叩くぞ」

勇太は前崎の頭を目掛けてバットを構えている。

「わかつた。わかつた」

かんなは前崎がひるむ隙に素早く立ち上がつた。

そして、台所にある出刃包丁を、かんなは力強く握り締めた。

「早く帰つて。そやないと、警察に強姦罪で訴えるで」

「お父ちゃんのあほ」

「あほんだらはお前やないか。

もつ、ちょっととの時に帰つてきやがつて

「早く帰りいな」

「わかった。」

わかつた。今日は邪魔が入つたから、これで帰るわ。  
そやけど、あの写真は作りもんやないで。  
嘘や思たら、あいつに聞いてみ

「帰つて。あんたの顔なんか見たないわ」

「わかつたわ。そやけど、あの女はええ女やつたなあ。  
俺かてあんな女やつたら欲しいわ」

「勝手にしたらええやんか。早く帰つて」

「お父ちゃんなんか大嫌いや。はよ、帰れ」

「帰れ言つたら、帰れ」

「お父ちゃんなんか、帰れ」

「今から、帰るど」や。

そやけど、あの女はええ女やつたなあ  
前崎はやつとの事で帰つて行つた。

「勇太、ありがとう」

かんなは勇太を抱き締めて、わんわんと涙を流した。  
泣いても泣いても、次から次に涙が流れた。

「信じていたのに

かんなは淳也の裏切りを許せなかつた。

「ママ、お父ちゃんが今度来たら、  
僕がバットで頭を叩いたるから、泣くのはやめて  
「勇太。ありがとう。違うよ。違うのよ」  
かんなはなおも泣き続けた。

悔しくて、悔しくて、かんなは涙を流し続けた。

「ママ、僕が守つたるから、泣かんとつて」

「ありがとう、勇太。うひひひひひひひひひひ

川を氾濫した濁流のように、かんなの涙は激しく激しく頬を伝つて  
滴り落ちた。

10話 壁

「ただいま」

淳也は実家に帰ると、真っ先に母親のたえの部屋を覗いた。

「今、帰りました」

「おかえり」

「お帰り、兄さん」

兄弟喧嘩をして以来、妹の智子は母親の面倒をよく見るようになつた。

「智子、ありがと。お袋の面倒を見てもうりつて。  
感謝しているよ。余り、無理はするなよ」

「智子がようしてくれてなあ。  
有難てえて、有難てえて」

「まあ、お母さんたら、娘なら当たり前の事よ。  
兄さんだつて、そんなに気を使わなくていいのに」

「今日は、綾瀬です」

「あり、綾瀬さんだわ。どうぞ～」

「うとうとう～あつ、淳也さん」

淳也を見るなり、かんなの表情が急に険しくなつた。

「かんなさん、お久し振りです。今、帰つて着ました」

「そう・・・吉見さんどひ」

かんなは淳也と田を合わせよひとはしない。

「かんなさん、顔色がわるいけど、  
どないしたん」

「吉見さん、大丈夫よ」

「綾瀬さん、風邪でも引いたの」

「いいえ、大丈夫です」

「かんなさん、疲れが出たのじやないですか」  
「・・・」

淳也の言葉をかんなは無視している。

「あら、何かあつたの」  
「いいえ、別に」

かんなは介護の仕事をできぱきと片付けた、さつそと帰つ支度をして、急いで玄関へ。

「今日の綾瀬さん、何か変よね。愛想がなくつて、少し機嫌が悪いみたいよ。あなた達、喧嘩でもしたの」  
「別に」

純一も同感だったので、かんなを追つて玄関へ。  
かんなは淳也を玄関で待つていた。

「吉見さん、少し話があるのでビ」

「吉見さんですか・・・ええ、いいですよ」

「仕事が終わつたら5時半頃新林池公園に来られる」「ええ、行きます。かんなさん、何か怒つているのですか」

「自分の胸に手を当てて聞いてみたら。じゃ、池公園の玄関で5時半ね」

（自分の胸に手を当てて聞けか。）

（いつたいかんなさんは何を怒つているのだろうか）

首を傾げながら、淳也はかんなを見送つていた。

暫くすると、かんなが自転車で現れた。

池公園で淳也はかんなを待つていた。

「かんなさん、僕、かんなさんを怒りすような事、何かしました?」「自分の胸に手を当てて聞いてみたら」

「自分の胸に手を当てても分からぬのですが

「・・・」

かんなは黙つて東屋の方に向かつて、急ぎ足で歩いてこる。

「もし、何かしたのだったら、許して下れー

「・・・」

「もう、絶対に怒らせるような事はしませんから

「吉見さん、黙つて歩けないの」

「吉見さんは勘弁して下さい。」

何か、かんなさんとの間に高い壁が出来たみたいで

「壁を作ったのは吉見さんじゃないの」

「いったい、何が壁を作ったのですか」

二人は東屋に着いた。

かんなは東屋の中の椅子に腰を下ろした。

「壁はこれよ」

かんなはすぐ前で立っている淳也に写真を渡した。

それは、ホテルのロビーで淳也とリサがキスをしている一枚の写真  
だった。

「あっ！ まいったな。どうしてこれを」

「やつぱり、身に覚えがあるのね」

「誰からもひつたのですか」

「前崎よ。

わざわざその写真を見せるために、前崎は私の家に来たのよ。  
そのために、私は前崎からレイプされそうになつたのよ。

私が納得できるように説明して」

かんなは田にこつぱい涙を溜めてくる。

「前の亭主があの場にいたのか。

誰か写真を撮つている者がいた事は感ずいていたが、それが前の亭  
主とは皮肉な事だな」

「どう言つことよ。隠さずに説明して」

かんなはぼとぼと涙を零している。

「あれは仕事なんだ」

「女性とキスをしてお金稼げる仕事があるの。信じられない」

「信じられないかもわからない。でも、本当なのだ」

「私は理解ができないわ」

「写真の彼女はクラブのナンバー1のホステスで、ナンバー2の女性から彼女を潰すように頼まれたんだ」

「そんな仕事がこの地球上に存在するの。たとえ、存在するとしても、どうしてその女性とキスをする必要があるの」

「男に夢中になれば、仕事が手に付かなくなる。そのために仕方なくしたのだ」

「それって、女性を騙す事よね。結婚詐欺に近いんじゃない」

「じゃないけど、近いかも知れない」

「淳也さんて、そんな仕事をしていたの。

結婚してからも、その仕事を続けるつもりだったの

「恥ずかしいが、そんな仕事をしていた。

でも、これで最後にするつもりだった」

「でも、その仕事は私にプロポーズをした後でしたのでしょうか」

「済まない。プロポーズをする前に約束をした仕事なので、ついいやってしまった。許してくれ」

「もし、私にプロポーズをしていなかつたら、まだその仕事を続け

るつもりだったの  
「続けていただろう」

「どうして、今回の仕事で最後にしようと思ったの」「かんなさん、勇太君を悲しませたくなかったからだ」

「私が信じられる根拠はあるの?」

「大阪のマンションを引き払つつもりだ。  
それに、堅気の仕事を探すそつと思つてこり」

「どうしてそこまでするの」

「命より大切なものが見つかったからだ」

「淳也さん、私本当に信じてもいいの  
「信じて下さい」

「淳也さん・・・」

かんなは立ち上がり、淳也を力いっぱい抱き締めた。  
そして、淳也の胸の中でわあわあと泣き崩れた。

「かんなさん、

僕は結婚詐欺まがいの恥ずかしい仕事をしていました。  
そして、女性を数多く騙してきました」

「うううう・・・」

「僕はこの仕事が恥ずかしい仕事だと言つ事が、  
かんなさんとめぐり逢うまで気が付かなかつた。  
かんなさんを大切にしたいと思った時、初めて気がつきました」

「かんなさん、本当に僕を許して下さい」

「淳也さん」

「本当に話して下せー」

ういりういり、髪せんぱい、あの女めぐらういりあれ

「許して下さい。入りました」

「あ～ん、わあ～ん、わあ～ん」

「許して下さる」

「ういっういっ、そして、最後まで行つたの」

「いいえ、キスだけです」

「どうして、一人つきりになりながら、キスだけなの」「かんなさんを裏切りたくなかったからです。信じて下せ!」

潔きほ苦しい嘘を付いた

「キスだけなら、あのままロジーですればいいじゃない」「皆が集まつて来て、見ていましたので」

「呆れた」「許して下さい」

「キスは淳也さんから」

「そうです」

「あんな人前で」

「仕事だからと割り切つていきました」

「呆れた人ね」

「私、淳也さんがわからなくなってきた。

だって、淳也さんて一重人格者なの。

私の前で見せる顔と、裏で見せる顔が全然違つじやないの」

「そうかも知れません。

いま、その裏の生活からは足を洗おうと思つています」

「本当に洗えるの?」「

「命に代えて洗います」

「本当に本当に」

「本当に本当にです」

「じゃ、私と指きりできる」

「出来ます」

「破つたら、私死ぬわよ。それでも、出来る」

「出来ます」

「人は指切りをした。

「破つたら、死ぬからね」

「わかりました」

「本当に仕方の無い人ね」

かんなは一人がホテルの中で、たとえ一線を越えていたとしても、今回だけは淳也を許そうと考えていた。

結婚詐欺まがいの仕事まで正直に白状した淳也に、自分への愛と誠実さを感じたからだ。

「かんなさんは、前の亭主からレイプされそうになつたと言つていましたが、本当ですか」

「ええ、本当よ。写真を見るための条件だったから、仕方なく家に入れたの。

私が写真を見て呆然としていたものだから、前崎に押し倒されたの」「何も無かつたですか」

「危ない所で勇太が帰つてきて、私を助けてくれたの」

「へえ、勇太君が」

「そうよ。勇太つたら、前崎のお尻をバットで思い切り叩いたのよ。凄いでしょ」

「勇太君が。見たかつたな」

「私が見たいのは相手の女性よ。凄い美人なんでしょう」

「まあ、そうかな」

「私よりずっと若いみたいだし。私は美人じゃないし、おばんよ。

それでもいいの」

「美人でなくとも、おばんでも、僕はかんなさんがいいんです」

「まあ、淳也さんたら、憎りしき」

淳也はやつとの事で、綻びを繕つことが出来た。

（破つたら、死ぬからね）

かんなが言つたこの言葉を、淳也は深く深く心に刻んだ。



淳也はかんなとの約束どおりマンションを引き取った。

暫く、実家の近くのビジネスホテルに、淳也は宿泊をしていた。

それを知ったかんなが自分の家で暮らすようにしきりに勧めた。  
それで、淳也はかんなの言葉に甘える事にした。

淳也が旅行用のカバンを一つ持つて、夕方かんなの家へ。  
淳也は大きな深呼吸をしてから、チャイムを押した。

ピンポーン。

「はい、今開けます」

「・・・」

「あら、淳也さん、待っていたのよ。  
あれつ、荷物は、それひとつだけ」

「古い生活は綺麗さっぱり捨て去って来ました。」

「このカバンだけです。約束ですか？」

「まあ、淳也さんらしいわ」

「今日からお世話をになります」

「いじらじや。勇太、淳也さんよ」

「あつ、おっちゃん、こんばんは」

「勇太君、今晚は」

「今日から淳也さんが一緒に暮らすのよ」

「わあ～い、おっちゃんが一緒に暮らしてくれる。わあ～い。わあ～い」

「勇太君、よろしくな」

「僕、おっちゃん大好きや」

「おじさんも同じだ」

「勇太、よかつたね。おっちゃんと一緒に暮らせて」

3人は夕食を済ませ、淳也と勇太は一緒に風呂に入った。

勇太は四畳半の子供部屋で先に寝た。  
かんなが風呂から上がつて来た。

淳也は食卓テーブルに座つて、かんなを待つていた。  
かんなは食卓テーブルに缶ビールを2本置いた。

「淳也さん、飲まない」

「いただきます」

「プシュー。」

プシュー。

「風呂上つのビールつておいしいわね」

「おこしここですね」

「淳也さん、今日から回転、ようじくね」

「ひりひり、めりしへ」

「お願いがあるのだけど」

「なんでしょうか」

「私たちまだ夫婦じゃないよね」

「そうですね」

「だから、夫婦生活は少し待つて欲しいの」

「了解」

「私が淳也さんを真に信じられるようになるまで待つて欲しいの」「了解の了解です」

「私は一田も早くその田が来て欲しいの。わかるでしょう」「わかります」

「その時になつたら淳也さんの事を、勇太にお父ちゃんと言わせるからね。それまで、待つていてね」「楽しみに待っています」

「頑張つてね。あつ、それから、

淳也さんはこの部屋に寝てもらえる

「了解です」

「私たちはあつちの6畳と4畳半に寝ていいわ」

「わかりました」

「それから、ここにあるものは好きにしてもうつていいからね」

「ありがとうござます」

「何か、質問はな~い?」

「食費は幾ら入れればいいですか」

「淳也さん的好きな額で結構よ」

「了解しました」

「じゃ、お休みなさい」

「お休みなさい」

かんなと淳也の奇妙な同居生活が始まった。  
淳也はふとんの中に潜った。

(大阪のマンションは処分する事ができた。  
後は、堅気の仕事を探すだけだ。  
俺に何が出来る。

コンビニの店員か、清掃員か……)

淳也は中々眠りに就く事が出来なかつた。  
朝方近くになつて、淳也はようやく眠りに就いた。

母親のたえが脳梗塞の発作をまた起こし、急死した。

淳也は葬式などで慌しい毎日を送っていた。  
新しい仕事は、まだ探せないでいた。

前崎は一人の仲がどうなつたか、気になつていた。  
かんなに電話をした。

かんなはあの男と一緒に暮らしている。

私たちの事はもう構うなど、電話で話していた。

（畜生！ あれだけ証拠を見せたのに。  
あいつらは別れるばかりか、一緒に暮らし始めやがつた。  
いつたい、どうなつてんねん。）

しゃあない、こうなつたら奥の手を使うしかないか）

そつ心が決まるど、前崎は車を運転して、京都へ向かつた。

前崎はかんなの家の近くの道路脇に車を止めた。

「勇太の奴、出てけえへんな」

前崎はいろいろしながら勇太を待つていた。

1時間ほど経つた。

勇太がバットを持ってこちらに向かつて歩いて来る。

「あいつ、またあのバットを持ってやがる」

「勇太」

「あつ、お父ちゃん、また来たな。」うちに来るな、また叩くぞ」

勇太はバットを両手で握り締めて身構えている。

「おいおい、やめんかい！」

今田は前の埋め合せで、これを持って来てせうたやないか」「

前崎は車の窓からサツカーボールを勇太に見せた。

「あつ、サッカー、ボールや  
「欲しいやろ」

「そんなもんいらんわい」

「あつ！」

サッカー ボールは勇太の胸に当たった。

卷之三

ボーリは道路に転がつて行つた。

勇太はボールを追っかけて歩道から車道に走り出した。

一 勇太、止まれ、止まらんかい。危ない！あああー！！！！！！！」

卷之三

対向車線の軽トラックが勇太をひいて走り去ってしまった。

「ひらあつーあほんだらー勇太をひき逃げしあがつて。  
戻つてこんかい」

前崎は車を出て、軽トラックのナンバープレートを確認した。

メモをし、大急ぎで、前崎は携帯電話で救急車を呼んだ。  
その後、前崎は警察とかんなに電話を入れた。

「勇太、勇太、しつかりせえ、勇太・・・うつうつうつ・・・」

前崎はポトポトと涙を流した。

そして、事態の進展に震えていた。

前崎は救急車が来るまで、勇太泣きながらを見守っていた。

ピイ～ポ、ピイ～ポ、ピイ～ポ・・・。

救急車は勇太と前崎を乗せて、近くの洛西医大付属病院へ。

勇太は全身を強く打撲し、病院に運ばれてすぐに死亡した。

「勇太～～勇太～～わあわああああ・・・」

前崎は大声を上げて泣いた。

「うつうつうつ・・・」

「俺が悪いのや。堪忍してくれ」

前崎は後悔しながら泣き続けた。

かんなは救急車に乗つている前崎から連絡を受けて、洛西医大付属病院に走つて行つた。

「勇太、死なないで。勇太、絶対に死ンじゃ嫌よ。勇太！」

かんなが病院に駆け付けた時には、もう遅かった。

「勇太！」

「勇太！」

「勇太、返事をして勇太！」

「勇太あああああああああああ！」

「勇太！」

かんなは勇太の遺体を見て泣き崩れてしまった。

「うううううううう、勇太！」

「ううん、ううん、ううん、勇太、なぜなの、うううう！」

かんなは悲しくて悲しくてたまらなかつた。

「勇太が死ぬなんて・・・嫌よ。

いやいや、絶対にいや・・・うううう・・・」

母親にとつて、最愛のわが子を亡くす事がこんなにも辛い事だとは・・・

かんなは残酷なこの事実を容易に受け入れる事が出来なかつた。泣いても泣いても涙が止まらない。

前崎を恨み憎む事で、かんなは痛みに耐えた。

かんなはひとしきり泣くと、前崎を鬼のような顔つきで睨み付けた。

「なんあんたがこゝにこゝてるの。  
どつ言う事が、教えて、うひうひ……」

「わかつた。俺が勇太にサッカーボールを渡したんや。  
そしたら、そのボールが勇太の胸に当たつて車道に転がつたんや。  
それを勇太が追つかけて行つて、車に撥ねられたんや」

「なんあんたがボールを勇太に渡す必要があるんや  
「それは、勇太と仲直りしようと思つたからや」

「嘘や！……何が、魂胆があつたんや  
「魂胆なんかあれへん」

「正直に言つて」

「ほんまは、勇太を俺が引き取らうと思つたんや。  
それで、勇太と仲直りがしたかったんや」

「何あんたが今頃になつて、勇太を引き取る必要があるんや  
「勇太を引き取つたら、またお前とよりが戻せる思つたんや」

「あんな事しといて、まだそんな事言つてるの、  
あんたが勇太を殺したんや」

「俺や無い。殺したのは、あの運転手や。」

警察に車のナンバー連絡してあるから、すぐ捕まるわ。

殺したんはあいつけ

「あんたや。

あんたが馬鹿な事を考えんかつたら、今でも勇太は生きてるわ。  
あんたや、あんたや、殺したんはあんたや。

勇太を返せ！勇太を返せ！勇太を・・・

かんなは気が狂つたようになつて、前崎の襟ぐりを掴んだ。

前崎はかんなの凄い剣幕にたじたじになつてゐる。

「あんたや。あんたや。あんたが殺したんや・・・」  
かんなは激しく泣いた。

「俺は警察に事情を説明せんとあかんから、これで行くわ」「いらっしゃ、逃げるのか。あんたが殺したんや。勇太を返せ！」

かんなは前崎の後姿を見送りながら、そこに泣き崩れた。

「勇太」 勇太 勇太 うううつ うううつ

かんなは肩をわなわなと震わせて号泣した。

余りにも辛い涙だつた。



淳也は洛西医大付属病院に向かつて自転車を飛ばしていた。

「勇太君が車にひかれた！」

淳也はかんながらの残酷な知らせが信じられなかつた。

受付でかんなの居場所を尋ねると、淳也はそこへ走つて行つた。

かんなが泣き崩れている。

淳也はかんなを見つけると、そこまで駆けて行つた。

「かんなさん、大丈夫ですか」

「あっ、淳也さん。うあ～ん、うあ～ん、うあ～ん」

かんなは淳也の胸に泣き崩れた。  
涙が止め処無く流れ落ちた。

「勇太君は？」

「うあ～ん、うあ～ん、あいつが殺したああ、  
うあ～ん、うあ～ん……」

「勇太君、亡くなつたんですか」

「うん、うつうつうつ……」

かんなは泣きながら首を縦に振った。

「そうだつたんですか。可愛そつに。かんなさん……」  
淳也はそれ以上、何も言えなかつた。

かんなは淳也の胸で涙が枯れるまで泣き続けた。

前崎は事件の一部始終を警察に説明した。

前崎が通報したプレートナンバーと目撃証言から警察は容疑者を洗い出した。

京都府警K署は、事件から数日後、業務上過失致死と道交法違反（ひき逃げ）の疑いで、軽トラック運転手 伊東 利夫容疑者（49）を逮捕した。

前崎はかんなに電話を入れた。

前崎からの電話とわかると、かんなは物凄いきつい表情になつた。

「なんやの」  
「まだ、つんつんしてんのか。まあええわ。  
実は、犯人が捕まるらしいで」

「犯人はあんたや」

「あほか。犯人は軽トラックの運転手やんけ。」

嘘や思たら警察行つて聞いてこいや

「真の犯人はあんたや。警察は騙せても、うちは騙されへん

「話になれへんわ。

犯人が捕まつたことを知らせてるのに、おかしいのと違うか

「おかしいのはあんたや。

あんたがボール渡さへんかつたら、勇太は死んでへん。  
うちはあんたを絶対に許せへん」

「あれは、不可抗力やろ」

「不可抗力やあれへん。あんたの意思や。

あんたがへんな魂胆に勇太を利用しようと思つたからや。

あんたを一生恨んだるわ」

「お前、勇太が死んだから頭がおかしなつてるわ。もう、切るわ」

「人殺し。勇太を返せ。勇太を返せ」

かんなは切れた電話に向かつて

「人殺し。勇太を返せ。勇太を返せ」

と、わめき、そして、泣き崩れた。

かんなは勇太が死んで以来、仕事には出ていなかつた。

働く気力が無かつた。  
生きる希望も無かつた。

かんなは一日中部屋に閉じこもつていていた。

焦点の定まらない目でぼんやりとしていた。

そして、時折、勇太の写真を眺めては

「勇太」  
「勇太」

と、言つてめそめそと泣いていた

食事の用意は淳也がしていた。

「体に悪いから食べて下さい」

淳也が幾ら言つても、かんなは頷くだけ。

3度の食事も、殆どかんなは手を付けていない。

そんなんある口、淳也は近くのスーパーに買い物に出掛けた。

「かんなさんは何をすれば食べてくれるだろうか」

あれこれ考えながら買い物をしていると、意外と時間が掛かってしまった。

「あつ、いけない。もう、こんな時間だ」

淳也はかんなを長い時間ひとりにはしたくなかったので、慌てて自転車で家に帰った。

「かんなさん、遅くなつてすみません」

淳也はドアを開けた瞬間、何か嫌な予感がした。

(空気が違うー)

胸騒ぎにあえぎながら、淳やは急いでかんなの部屋の襖を開けた。

「ああっ……！」

かんなは畳に倒れて死んだよつになつてこる。

その前にこまゝ睡眠薬の空き瓶と数粒の錠剤、コップ、封筒が散乱している。

「かんなさん」

「かんなさん」

淳やはかんなの胸に耳を押し当てる。  
かすかに弱い呼吸音が聞こえるよつだ。  
かんなは昏睡状態になつてこる。

「まだ、生きてこる」

そつ思つと、急いで淳やは救急車を頼んだ。

「買い物に時間をかけずに、もつと早く帰つてくれれば良かった

「かんなさん、なぜなんだ」

「なぜ、僕のために生きてくれないんだ」

淳やは悔しきの余り、涙を流した。

涙でかすむ向こうにほんやうと封筒が見えた。

「あつ、かんなさんの遺書かもわからない」「淳也は封筒の中から一枚の便箋を取り出した。

淳也さんへ

淳也さん、本当に」免なさい。

私、勇太無しでは生きて行けないの。  
それに、勇太を殺した前崎が  
何の罪に問われる事も無く生きていると思つと、  
私、ギュッと胸を締め付けられるようで  
苦しくて、苦しくて、耐えられないの。

淳也さんと

早く夫婦になりたかった。  
早く結ばれたかった。  
そして、勇太と私と淳也さんが家族になる日を  
夢見ていたのに。  
それも、出来なくて・・・。  
本当に、本当に、許して下さい。  
さよなら。  
かんな

「かんなさん・・・」

淳也は悔し涙を流した。

(勇太君を殺したのはあの男だ)

かんなの遺書を読んで、淳也はかんなと、いま同じ考えになつた。

淳也は何度も何度も勇太が死んだ原因を、かんなから聞かされた。

「眞の犯人は前崎なのに、警察は何も出来ない。

こんな事が許されているなんて、私気が狂いそうよ」

淳也はかんなの言葉を思い出すたびに、それを確信した。

「警察があの男を罪にできないなら、俺があの男を罪にしてやる」

淳也が固く決意した。

ピイ～ポ、ピイ～ポ、ピイ～ポ・・・。

その時、救急車が来た。

かんなは洛西医大付属病院に運ばれ、そして、緊急治療室へ。

すぐに胃洗浄などの処置が医師からかんなに施された。

かんなは無事命を取り留める事が出来た。

淳也は勇太の葬式の時に紹介された、神奈川に住むかんなの母親に電話で連絡をした。

かんなの母親は、かなり驚いた様子で、すぐに病院に行くと言つた。かんなは緊急治療室から、個室に移された。

淳也はベッドで眠り続けるかんなを優しく見守っていた。

「命が助かつて良かつたな」

「遺書を読んでかんなさんの気持ちは良くなかった。  
かんなさんの苦しみは、俺が必ず受け止めてやる」  
淳也はかんなに無言で語り続けた。

夜遅くにかんなの母親の綾瀬奈津子がかんなの病室に訪れた。

「お世話になります。綾瀬です。かんなはどうですか  
「瞼の洗浄も終わって、命には別状ないみたいですね。  
今まだ眠っていますが」

「お世話になります。綾瀬です。かんなはどうですか  
「お母さんも神奈川から来られたのですから、大変お疲れでしょう」  
「ここに座って下さ」

淳也は奈津子に椅子を差し出した。

「ありがとうございます。座らせてもらいます  
「どうぞ」

「どうしてかんなは睡眠薬なんか飲んで  
自殺しようと思ったのですか」

「勇太君が死んでから、ずっと泣き続けていました。  
勇太君無しでは生きていけなかつたのでしょうか」

「かんなの気持ちもわかるけど、何も自殺までしなくても

「ううう・・」

その時、かんなが呻き声を上げた。そして、かんなは目を開けた。

「ううん、死なれ・・・」

「死なれへん かつた・・・」

かんなはうつろな目でか細く呟いた。

「かんな、助かつてよかつたね」  
奈津子が微笑みながら言った。

「ええ事なんかないわ。私は死にたかったんや」  
「何て事を言つの。」の子は

「淳也さん、何で死なしてくれへんかつたん」

「・・・」

「何で〜、何で〜・・・」

「そんな事できる訳ないだろ」

「何で死なせてくれへんかつたん。何で〜何で〜」

「かんな、吉見さんに何て事を言つの」

「私は死にたかったんや。勇太の所に行きたかったの。」  
うつうつうつ、うつうつうつ

かんなは激しく泣いた。

「勇太と私を離すなんてえ。ひどいわ。許さん。  
淳也さんを絶対に許せへん。うつうつうつ」

かんなはうつて泣いて泣き続けた。

「絶対に許せへんから・・・」

「グ～グ～グ～」

「吉見さん、許してやつてね。

気持ちが高ぶつていいるだけだからね」

「わかつています。

僕でよかつたら、幾ら当たつてもらつても結構です。

それで、かんなさんの痛みが和らぐなら」

「吉見さん、ありがと」

「かんなさん、おとなしくなりましたね」

奈津子はかんなを覗いている。

「あらつ、おとなしくなつたと思つたら、  
かんなはグ～グ～いびきをかいて寝てるわよ」

「あらつと、夢の中でも僕に当たつたのでしょ」

「そうかもしけませんね」

二人は顔を見合させて笑つた。

かんなは健康が回復すると、病院を退院した。

母親の奈津子も神奈川に帰つた。

かんなは退院してからも相変わらず元気が無かつた。



13話 死刑

淳也はかんなの家を出た。

その時、かんなは不服そうな顔をして呟いた。

「何で家を出る必要があるの」

「勇太君が死んで、夫婦でないものが  
いつまでもこんな形で生活するのも不自然だし。  
一度、この家を出て、もう一度考え直したいのだ」

「また、結婚詐欺まがいの仕事がしたくなつたの」

「それは、無い」

「ああ、そう。それやつたら、あんたの好きにしたら

淳也はそれから大阪のビジネスホテルを転々とし、時を計つていた。  
かんなの家を出てから1ヶ月後。

以前、かんなの携帯から書き写した前崎の電話番号を書いたメモを、  
淳也は取り出した。

淳也は前崎に電話をすると、かんなが危篤と嘘を付いた。  
そして、前崎を夜の8時とかんなの家の前に呼び出した。

8時前に前崎が車でやって来た。

淳也は車道の前の歩道で前崎を待っていた。  
前崎を見つけると、淳也は皮手袋をはめた。

「かんなの具合まだいいや」

前崎が車から出ってきた。

「一進一退と言つ所かな。

それより、かんなさんがお礼をしたいらしい」

「かんなが俺に。どんなお礼や」

「お礼はこれだ」

そう言つて、淳也は前崎の顔面に思い切りパンチを食らわせた。

バシーン。

「な、なにするねん」

「お礼がしたいんだ」

「だ、だましやがったな」

ブスーン。

淳也は、さらに前崎のボディに強烈な一撃を加えた。

前崎はたまらず前かがみの姿勢になつた。

そこへ、淳也のアッパー・カットが前崎の顎を捕らえた。

「う、う！」

前崎はよろけながら倒れた。

淳也は道路に倒れている前崎のみぞおち辺りを情容赦なく蹴り上げた。

もう一発。

さらり、力を込めてもう一発。

「う、う！」

前崎はぐつたりとなつて倒れている。

道路脇にはあらかじめ用意してあつたウイスキーの瓶を、淳也は取り上げた。

「さあ、宴会が始まるぞ。飲め。さあ、飲め」

淳也は無理やり前崎にウイスキーをがぶ飲みさせた。

ガブ、ガブ、ガブ……。

淳也は嫌がる前崎の口を力付くで左手で開けると、右手でウイスキーを流し込んだ。

ガブ、ガブ、ガブ……。

ヒイ～ グッホン、ゴホン、ゴホン・・・。

むせたのか、前崎が咳込み出した。

ゴホン、ゴホン、ゴホン・・・。

前崎の顔と上着はウイスキーが零れたのか、濡れてウイスキーの臭いがブンブンしている。

「これ位でいいだろ？」

淳也は前崎を前崎の車の後部座席に押し込んだ。

前崎は後部座席でぐつたりとしている。

淳也は車を運転して時間を潰した。

午前2時頃に先ほどの場所に戻ってきた。

後方座席を淳也が見た。

まだ、前崎はぐつたりとしている。

証拠を残さないために帽子を被り、皮手袋をした淳也が、ウイスキーの瓶を持って車から出た。

そして、後部座席を開けると、ぐつたりしている前崎の口に、淳也は無理やりウイスキーを飲み始めた。

「さあ、二次会だ。たっぷりと飲みやがれ」

ガブ、ガブ、ガブ・・・。

「やめてくれ。やめて・・・」

前崎は必死でウイスキーを拒否している。

「もつと、飲むんだ」

淳也は嫌がる前崎の口に、無理やりウイスキーを流し込んだ。

「もう、いいだろ。ちょっと、いい待って」

そう言い残すと、淳也は後方に止めていた、あらかじめ用意していた盗難車の方へ。

そして、淳也はその車を前崎の車のすぐそばまで運転して来た。

「勇太君と同じじめに会わせてやるから、待っていろ」

淳也は前崎を後部座席から引き摺り出した。

前崎を勇太君がひき逃げされた同じ場所に、淳也は引き摺つて行つた。

「何をする気や。やめてくれ」

前崎が弱弱しい声を上げた。

淳也は辺りを見渡した。

午前2時を過ぎた時間のせいか、人通りや車も走つていなかつた。

「よし、いいだろ？」

前崎の声を無視して淳也が盗難車に乗り込んだ。

淳也は車をかなりバックをさせてから、前崎を両掛けで発進させた。

アクセルを踏み込む。

「許してくれ」

前崎はか細く叫びながら立ち上がりをしている。

「助けてくれ」

前崎がこちらに向かって、両手を合わせている。

バーン。

淳也は前崎をひき、走り過ぎた。

キッキキキキキー。

方向を急転換せると、倒れている前崎を両掛けで、もう一度アクセルを踏み込んだ。

グシャグシャ。

前崎は車道の中央で血を流し、死んだようになっている。

車から降りると、淳也はウイスキーの瓶を前崎の車から取り出し、

前崎が横たわっている辺りに撒いた。

そして、前崎の手に瓶を握らした。

瓶にはほんのわずかウイスキーが残っていた。

「かんなさん、これでいいでしょう」

淳也がかんなの自宅の方を見詰めて呟いた。

淳也は自らの手で、勇太を殺した真犯人、前崎を死刑にした。

淳也は盜難車に乗り込むと亀岡方面に車を走らせた。  
途中、淳也は車を捨て去った。

(どこに行こうか)

そう呟くと、淳也はそこから姿を消した。

「あれつ、前崎じゃないの」  
かんなは前崎が泥酔して、車にひき殺された事を夕刊の記事で知つた。

そこには、次のような記事が載せられていた。

泥酔男、車にはねられ死亡

何日午前3時ごろ、京都市西京区の市道で、大阪市西区の会社員前崎孝太（38）が血を流して倒れているの通行人が発見。

病院に運ばれたが全身打撲でまもなく死亡した。

京都府警K署は、男性が酒に泥酔し、前と後ろから来た車にはねられたと見て、ひき逃げ事件として操作を開始。

なお、事件は午前3時ごろに発生したことから目撃情報が少なく、犯人に結び付く有力な情報は得られていない模様。

新聞を読みながら、

「そう言えば、

この近くで真夜中に救急車のサイレンが幾つも鳴っていたな」と、かんなは呟いた。

急いで、かんなは団地の外に走つて出た。

道路に出ると、2台のパトカーが止まつていた。

道路を歩いていると、花束が置いてある。

「あつ、ここだわ」

「これつて、勇太と殆ど同じ場所じゃないの」

「偶然かなあ」

「親子が同じ場所で、同じひき逃げで死亡」するかなあ

「きっと、偶然じゃないわ」

「じゃ、誰が?」

「淳也さん?」

「まさか」

「きっと、そうだわ」

「なぜ、淳也さんがひき逃げを」

「真の犯人は前崎なのに、警察は何も出来ない。  
こんな事が許されているなんて、私、気が狂いそうよ」

かんなは自分が言った言葉を思い出していた。

「やつよ」

「きっと、やつよ」

「淳也さんは私のために前崎を警察に代わって罪にしたんだわ」

「だから、淳也さんは一ヵ月ほど前に家を出たのか」

「きっと、そうだわ」

かんなは辺りを見渡した。

「誰もいないで良かった」

「ついつい、かんなは急いで自転車置き場まで走つて行った。

「淳也さん、そこまで私の事を」

「淳也さん、いまどこ这儿の」

「智子さんが淳也さんの居所を知つてゐるかもしだい」

かんなは思い切り自転車のペダルを踏んだ。

智子の家に着いた。

たえが亡くなり、最近、かんなはこの家にせまい無沙汰していた。

「今日は、綾瀬です」

「あら、お久し振り」

淳也の妹の智子が顔を出した。

「母が生存中は隨分とお世話になりました」

「いいえ~。

今日は智子さんにお聞きしたい事があつてお伺いしました

「あら、何かしら

「淳也さんの住所ご存知ないですか」

「兄さん、かんなさんの家を出たの。少しも知らなかつたわ

「智子さんもご存知では無かつたですか」

「ええ、聞いていないけど。

兄さん、なぜかんなさんの家を出たの」

「私が勇太を亡くして、ずっと落ち込んでいましたから、ついつい淳也さんに当たつたもんで」

「子供を亡くせば、無理ないわねえ」

「智子さん、ありがとうございます。また別の所を当たつてみます」「兄さんの住所がわかれれば、私にも教えてね」

「はい、わかりました。では、智子さん失礼します」

「元氣でね。 わよつなら、かんなさん」「わよつなり」

かんなは血弾を手指して自転車のペダルを漕いでいた。

（淳也さん、ご免なさい。私が悪かつたわ）

（淳也さんがあんなにまで私の事を思ってくれていたのに、私は勇太の事ばかり思い出して泣いてばかり）

（淳也さん、帰つて来て）

（もう一度、やり直しまじょう）

（今度こそ夫婦になれるよね）

（お願い、帰つて来て）

かんなは自転車のペダルを漕ぎながら、心の中で大声で叫んでいた。

## 14話 逃亡

14話 逃亡

勇太が死んでから1年後（実際はその1日前）

淳也は九州にいた。

あの事件以来、淳也は新聞を気にかけて読んでいた。

が、前崎をひき逃げした犯人に関する記事は掲載されていなかった。

「今日も新聞には載つていなかった」

額の汗を拭きながら、淳也が小さく呟いた。

「でも、油断は禁物だ」

スコップで土をすくい上げると、淳也は大きく放り上げた。

淳也は大牟田市で道路工事の土木作業員として働いていた。

その日、仕事が終わると、淳也は西鉄新栄町駅前にあるデパート小筒屋に買い物に出掛けた。

そして、おもちゃ売り場で恐竜のフィギュアを買つた。

100円硬貨ばかりを渡したので、店員は不思議そうな顔をしていた。

「ジラッキの中の100円玉は鷹太君にプレゼントしようと思つてたけど、恐竜になつてしまつたな」

フィギュアの入つた紙袋を手に提げながら、淳也は苦笑していた。

三池にあるアパートに帰り、ドアを開けようとしていると、隣の部屋に住む北条 サエがドアを開けた。

「あら、吉見さん、お久し振り

「今晚は、今日は休みですか」

「ズルよ。余り、気が滅入つたので休んだのよ。時々やるのよ。いやな事でもあつたのですか」

「いやなことばかりよ。あつ、吉見さん、

今ひとりで飲んでいる所なの。一緒に飲まない

「今日は遠慮しどきます」

「そんな事言わないで、付き合つてよ」

「仕方ないな。少しだけですよ」

サエはむつやつ淳也の手を引っ張つて部屋の中に引き入れた。

部屋に入ると、小さな食卓テーブルがあり、その上にウイスキーの

瓶と水割グラスがあつた。

「吉見さん、水割りでいい?」

「じゃ、一杯だけいただきます」

サエは新栄町のスナックで働いていた。

「私ねえ、九州は好きなよ。

食べる物もおいしいし、人間もいい人が多いしね」

「へえ、そなんだ」

「でも、ひとつだけ我慢ができない事があるの」

「それって、何ですか」

「言葉よ。あの訛りだけは、どつも好きになれないの。  
関西弁もそつだつたけど、*ひからひはもつとよ*」

「北条さんは、もともと関東の人ですか」

「吉見さんもそつだつよ」

「えつ、まあ」

「吉見さんて標準語でしょ?」

「私、吉見さんと話をすると、ほつとするのよ。

でもね、西鉄バスに乗るじやない。」

車中が方言まるだし。私、圧倒されちゃつて

「僕は気にならないですね」

「あつ、吉見さん、もう一杯どう?」

「もう、結構です。用事がありますので、これで失礼します」

淳也は帰りつと思ひ立ち上がった。

サエはいきなり淳也に抱き付いてきた。

「何をするんですか」

「ねえ、いじでじょ」

「腕を離してください」

「私、前から吉見さんといつなると想つていたの」

「やめないか」

サエはその言葉を無視して、淳也の手を両手で引つ張った。

奥の部屋のベッドに淳也を連れ込もうとしているみつだ。

淳也はその手を振りほどくと、サエをベッドに力任せに押し倒した。

「俺を甘く見るな

そう言つと、淳也は部屋から立ち去つた。

あくる日、淳也は休みを取つて、京都へ向かつた。

京都駅からかんなの家の前までタクシーを走らせた。

淳也は道路から301号室のかんなの家を見上げた。

「かんなさん、ご無沙汰しています。  
大分、落ち着かれましたか。

今日は勇太君の命日です。  
手を合わせにきました。

逢わずに帰るつもりです。  
どうか、お元気で」

そう言つと、淳也は勇太がひき殺された場所へ向かつた。

淳也は恐竜のフィギュアをその場所に供えた。  
そして、淳也は両手を合わせた。

（勇太君、会いに来たよ。  
ジエラシック・ワールドは楽しかったな。

また、連れて行けないのが残念だ。  
その代わり、これを置いておく。

気分だけでもジエラシック・ワールドに行ってくれ。

来年、また来るからな。

待つてろよ。じゃ、あばよ

手を合わせ終わると、待たせてあつたタクシーに乗り、淳也は京都  
駅へ向かつた。

その5分後、かんなは花束を持つて勇太が死んだ場所に向かつてい

た。

そこに着くと、紙袋が供えられていた。

かんなは紙袋の中から、包装紙に包まれた箱を取り出し、その箱を開けた。

中には、恐竜のフィギュアが入っていた。

「あつ、淳也さんだ。

間違いないわ。

淳也さんここに来たのだわ。いつ来たのかしら」

「淳也さん

「淳也さん

かんなは辺りを見渡し、名前を呼んだが、淳也はいなかつた。

紙袋に馴染みの無い店名が印刷されているのに、かんなは気が付いた。

かんなは急いで家に帰り、パソコンで調べてみた。

『小筒屋』で検索すると、

『小筒屋』のホームページが出て来た。

ホームページから、『小筒屋』が九州に数店舗を持つ地方の百貨店である事がわかつた。

「淳也さん、いま九州にいるんだわ」

かんなは紙袋を思いを込めて抱き締めた。

（淳也さん、ご免なさい。

1年経つて、やっと勇太を「くへした痛みに

耐えられるようになつたわ。

もう一度、やり直したいの。

やり直して、真の夫婦になりたいの。

もう一度だけ機会を『えで。

淳也さん、お願いだから、

淳也さん、帰つて来て）

かんなは淳也を、そして淳也の愛を、心から深く求めていた。

淳也はJR京都駅の公衆電話の前にいた。

そして、かんなに電話をしようか、やめようか、迷つていた。

100円硬貨を電話機に入れ、かんなの家の電話番号を押して、最後の番号で、淳也は電話をするのを止めた。

「やはり、声を聞かずに帰るわ

そう決心すると、淳也は新幹線のプラットホームに向かった。

淳也は博多行きのプライムホームに着いた。

出発まで少しの時間があった。

淳やはスラックスのポケットから一枚のコインを取り出した。

それは、ジョギーの中にあつた最後の100円硬貨だった。

淳やは今の生き方をコインに尋ねてみるつもりでいた。

裏か。

表か。

淳やはコインを大きく上に放り上げた。

コインは空のペニーハンマーでキラキラと輝いていた。

(ア)

\* この物語はフィクションです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3648d/>

---

コイン

2010年10月9日02時37分発行